
夢見る竜は、宵に啼く石と化す

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る竜は、宵に啼く石と化す

【Nコード】

N7375L

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

隣町にある6500万年前の地層から、恐竜の化石と一緒にひとつの人骨が発見された。好奇心旺盛な二人の少年は、その化石が発見された隣町へ向かう。

その化石発見現場の近くで「恐竜時代に行けると言うタイムマシン」と、「恐竜に変身する技術」を開発した博士に、声をかけられた。そして、少年たちは恐竜になって、6500万年前の地球に行くことになった。

エピソード的プロローグ

——中生代。

「無脊椎動物生命が生まれてから恐竜が現れる前までの古生代」と、「恐竜が絶滅し哺乳類・鳥類繁栄の新生代」に挟まれた地質時代のひとつ。約2億5000万年前から約6500万年前まで続き、様々な種類の恐竜たちが生まれ、繁栄した時代。

中生代は、さらに三疊紀トリアス、侏羅紀ジュラ、白堊紀クレタスの3つの紀に分かれる。その中でも、白堊紀は恐竜が最も種類に富んだ時代であり、最も繁栄したと言える時代である。

——中生代白堊紀。

その時代、パンゲア大陸が完全に分裂し、巨大な大陸だったところには、届くことが無かった湿潤な海の風が吹くようになった。気候帯が現れ始め、裸子植物の緑ばかりだった大地にも、花が咲くようになった。それは大陸の移動と地球の気候の変化がもたらした現象だった。そして空には、翼竜以外に鳥類が飛び回る兆しを見せていた。

安定した気候の下で体が巨大化していった侏羅紀じだいは終わりを告げたのだ。

気候の変化への行進にあわせ、それぞれ適応するために恐竜たちが独自に進化し始めた証拠である。

——白堊紀後期。

しかしその一方で、恐竜の衰退と絶滅の時代でもある。

ひとつの物事が終われば、それは、ひとつの始まりを表す。
恐竜たちの時代が終わっても、その後には僕らの時代が待っている。

そうやって僕たちは、その大きな循環の中、小さな繰り返しをしながら生きている。

そう、それは夏休みが終わって、新学期が始まるのと似ている。

あの夏休みは、大冒険だった。

しかし、きつと、誰に言っても信じてもらえないだろう。結果は示されているが、その原因となったものを示す資料は、もう記憶という形のないもの以外に、もうこの世に無いのだから。目の前に提示できる証拠が無いのだ。

口に出すのは簡単である。だが、言葉に出していったとたんに、それは、今の常識では非現実的なこととなり、頭がおかしい者として、病院送りにされてしまうだろう。

しかし、それは、確かに、まぎれもなく、存在した^{過去}事実なのだ。

再び、誰かが、タイムマシンというものを造らない限り。

あの時代、あの場所に行かないかぎり……

事件の^{原因}始まりと言うものは、たいてい些細なものである。

よみがえる記憶は、いつもそこからなのだ。はたから見れば、単なる日常のひとコマであったはずなのである。

『6500万年前。恐竜の化石と一緒に人骨発見?』

そういう見出しで書かれた新聞記事がすべての始まりであった。多少、非科学的なトンデモな話題ではあったが、それはいつもと変わらぬ何の変哲も無い日常だったはずである。

その時は、思いもよらなかった。その記事の答えになりうる事件に巻き込まれることになろうとは。

その事件の10年後、僕は地球環境系の大学に入学し化石に触れて研究している。多少、遺伝子工学的なものにも手を出しているが、専門は古生物である。

そして、偶然にもあの化石を目にする機会を得た。あの時、話題になっていた白亜紀後期の地層から発見された、あの謎の人型の化石を。

その化石のある事実を知って、驚愕する。

「……にしても、6500万年ぶりの再会か」

あの中生代で過ごした日々がよみがえる。

人生は有限とはいえまだ長い。縁があれば、あの時代に出会った友人にも会うことがあるかもしれない、見つけることもあるかもしれない。それと出会うのは、限りなく0に近いことなのだが……

僕は、空を見上げた。

鳥が空を飛んでいる。自由に、羽ばたいている。

あの時代から、脈々と続いている進化の歴史の結晶。

——すべての始まり。それは、中学校最初の夏休み。僕らが恐竜
だったころの話。

6500万年たった今も、大地はその痕跡^謎を残している——

エピソード的プロローグ（後書き）

ちなみに、かの有名な、ジュラシックパークに登場する恐竜のほとんどは、白堊紀のもの。

なぜ、「ジュラシック」にしたのか言うと、白堊という言葉が英語圏では普通名詞だから、より エキゾチック 異国風な印象を与えるために「ジュラ」にしたという説がある。

ジュラは、ドイツ、フランス、スイスの国境付近にあるジュラ山脈にからきたものだしね。

それに、クレタシアスパークだと、なんとなく言いにくいしね：

：

夢見る化石（こんせき）

「ねえ、宇宙人ってさ、恐竜人間に似ていると思わない？」

オカルト系の雑誌を片手にひらひらさせ、ケンジロウはそう語る。表紙には、大きな目を持っている奇妙な色の2足歩行の生き物が描かれていた。今回の特集は、宇宙人らしい。

「あ、また、空想話がはじまったよ。でもさ、この前は、未来人に似てるって言ってなかったけ？　で、その前は、地底人」

シヨウは、いつものように、その話題に突っ込みで返す。

いつもケンジロウがにこしながら、持ってくる非科学的なトシデモな話題。それは、彼らにとっては、何の変哲も無い話題である。

そんなある日、ケンジロウは、息を切らせて教室に入ってきた。

「ほね、ほね、ほねが出た」と、意味不明の発言をしている。

「庭で？　それは、殺人事件だね」

シヨウはいつものように、ケンジロウの話題にボケで返す。

「ちがう、化石。骨の化石。恐竜時代から」

「そりゃあ、骨くらい出てくるよ」

彼らの住む土地は、日本でも有数の恐竜化石が出てくる場所なのだ。年に何回かは、その時代の発見があり、地方新聞にも小さな記事が取り上げられる。恐竜のものとは限らないが、何かの化石が出てくる事自体は、取り立てて珍しいことではないのだ。

「だから、これ！」

ケンジロウは一枚の新聞の切抜きを机の上に置く。その記事の文

字は、特徴的なフォントが使われている。シヨウはこの文字を見て、ケンジロウが持ってきた記事が、マイナーな地元紙のものである事に気がついた。

化石の産地であるせいもあって、その地方紙には、全国紙に載るほどでもない化石の発見や、少し真偽が怪しいネタがよく掲載されるのだ。この独特な仕様のせいで、月1でしか発行されない新聞だが、ちょっとしたマニアには需要があるものなのだ。

「骨。恐竜の時代の地層から、出てきたんだよ。人に似た骨が」

それには、こう書かれていた。

『6500万年前。恐竜の化石と一緒に人骨発見?』

新聞の見出しには、堂々とそう書いてあった。

「県内の……しかも、隣町だね」

新聞の本文を読み終え、シヨウはそうつぶやいた。

「これは、恐竜人間の骨だよ」

ケンジロウは、興奮気味に言う。

「それ、地底人の骨かもよ? 宇宙人の骨かもよ?」

シヨウは、いつものように茶々を入れる。

「いや、あの骨は、絶対に恐竜人間のものだよ」

白黒の写真だけでは、どれがどこの骨で、何なのかいまいちわからない。実物の化石を見たとしても、どこがどこの骨なのか分からないくらいばらに化石になっていたら、素人目には何が何やらわからない可能性も大いにあるのだけれども。

無論二人は、本気でこれが恐竜人類や地底人だと思っているわけではない。仮に、もしも、そうだったら、ロマンがあるから、話が弾むのだ。

この新聞は、どちらかといえば非科学的なオカルト寄りで、話題

つくりのためにより刺激的に興味をそそるように書かれているのを彼らは知っている。そういう新聞ゆえあまり科学的なことは詳しく書かれていないが、この手の化石は、地質学に少し詳しい知識があれば、説明ができる仮説がある。

それは、「地震や地殻変動が起こり、たまたま地上に出てきた恐竜時代の地層の上で、息を引き取った人類の化石」というもの。近くで発見されたからといって、それが必ずしも、近い時代に生きていたとは限らないのだ。

「それにしても、偶然とはいえ、中生代の地層の上で化石になるなんて、うらやましい人だな」

「そうだねえ」

彼らは、この記事をネタにしばらく会話を楽しんだ。答えなどではなくて良いのだ。このやり取りが楽しいのだから。

「……にしても、実物、見てみたいな」

「だねえ」

しかし、この化石を一般人の目に触れることは、まずないだろう。普通に発見された化石でも、一般公開するためには、数年かかることもある。ましてや、その今回発見された化石は、恐竜と人類、ありえない組み合わせなのだ。

それでは、それで、学術的には、珍しい事象であるが、しかし、このような化石を一般に公開しても、オカルトのネタにしかならない。そう言ったややこしい問題を抱えているので、この手の化石は、一般の目に触れることはまずない。

「ああ、なんだかこの場所だけでも、行きたくなってきたね」

偶然にも、自転車でいける距離にその現場があるのだ。手の届く距離にそれがあるので、せめて発見された地の空気だけでも、吸っておきたいという、欲求が出てくる。そして、運がよければ、自分たちも、「何か」見つけるかもしれないという、淡い期待と妄想と

野望と共に。

「じゃあ、夏休みに入ったら、見に行きますか」

「そうだね、来週にはもう、夏休みだし、ちょうどいいね」

授業開始の鐘がなり、こうして、二人のこの会議は、おひらきになった。

夏休み初日の早朝。ショウとケンジロウの二人は、待ち合わせの時間に遅れることなく、学校正門前に集合した。

今日は、かねてより計画していた、隣町への遠征を実行するのだ。目的地は、「あの化石」が見つかった河原。少し離れた場所にあるのだが、自転車での移動だ。

この分だと、本格的に暑くなる前には着くだろう。

二人が住む地域は、もともと恐竜の骨がよく発見される地層があることで有名である。それは、侏羅紀（ジュラ紀）から白堊紀（ハクア紀）の地層で、「手取層群^{てとりそうぐん}」と言う。手取層群は富山県、福井県、石川県、岐阜県に分布しており、植物化石、貝の化石など、その時代の様々な化石が見つかるのだ。そして何よりも、その地層からは、恐竜の化石が見つかることがあるのだ。

その地層があるせいもあって、隣県には世界でも珍しい恐竜を専門とした博物館さえあるのだ。それは、恐竜マニアならば、一度は訪れたいこの博物館である。

恐竜に興味のない市民から見たら、恐竜専門の博物館は無駄に思えただろう。しかし、今では、世界三大恐竜博物館のひとつと称されることもあるほど、すごい博物館になった。しかし、そのことを知っている人は、わずかだと思っけれども。

ショウとケンジロウの住む地方は、このように古生物の神秘に触

れ合うには、とても恵まれた環境にあるのだ。

少年たちは、たわいもない話をしながら、堤防の上に作られたサイクリングロードを自転車で走る。

日はまだ朝の気配を残し黄色に輝いて、川の表面で乱反射している。その光は、自転車と同じ速度で、水面を併走している。河原は緑の原で湿った空気に揺れていた。

道は、基本的にコンクリートで舗装されているが、時々砂利の道や、土を固めただけの道もある。夏の暑さに乾燥して硬くなったその土の道には、ところどころに化石のような足跡を残していた。自転車が、その段差に乗り上げるたびに起こる小さな衝撃に、体勢を崩さないように、バランスをとる。

上流へ向かうほど、河原の石はだんだん丸みを失っていく。ところどころに転がっている、角ばった大きな石が目立つようになってきた。

二人が走る河原の対岸は、切り立った崖で、黄土色と褐色の地層が草木の間から顔をのぞかせている。あの地層のどこかに、まだ発見されていない、太古の昔生きた生物たちの痕が、眠っているかもしれないのだ。

「きつと、あそこだね」

河原の一角にブルーシートで覆われた場所や日よけのテントが設置されているがあった。その周りには、進入できないようにするための簡単なバリケードもめぐらされており、関係者以外立ち入り禁止の看板も設置してある。警備員もしっかりと見張っている。予想通り、化石が発見された場所は、厳重に閉鎖されていた。

今はまだ、発見されたばかりで忙しいだろうから、もう少し経って落ち着たところに、「夏休みの研究にしたいから、ちょっとだけ」

と、頼み込めば、見学くらいできるだろう。ある意味で、子供の特権の乱用である。

「しかし、ここからだ、あんまり見えないな」

「しかたないよ。それでも、ここが一番見えるんだから」

少年たちは、発掘現場が見渡せる少し離れた土手で、作業している人の姿を観察していた。ただ、ぼんやりと、その様子を眺めていた。

その場所に陣取り、発掘現場を見ていた時間は、半刻にも満たなかっただろう。そのくらいの時間が経った時、背後から二人に声をかけたものが現れた。

「君たちは、あの化石発見の記事を見てここへ来たのかい？」

そう、問いかける男性の声。白髪で、しかも白衣の老人が、そこにはいた。その顔は、どこかで見たことあるような気もしたが、思い当たる節がない。

ショウは、ケンジロウと目で会話する。ケンジロウの知り合いでもなさそうだが、彼もまた、どこかで見たことがあるような気がするという顔をしていた。

「はい、そうですけど……」

ショウは、遠巻きにしながら、様子を伺うように、肯定の言葉を発する。

「恐竜は好きかね？」

その老人は、さらに質問をしてくる。

「まあ、好きですが……」

二人は、この老人の意図が読めないでいる。二人が戸惑っていると、老人は、本当の目的らしき言葉をかける。

「私の家に来ないかい？ 多少化石を持っているので、それなりに楽しめるだろう。冷たいお茶もご馳走しよう」

……怪しい！ 怪しすぎる！

最近、子どもを狙った誘拐とかそういう犯罪で、世の中物騒なのだ。声をかけてきたのが、気のよさそうな白髪のおじいさんだったとしても、人は見かけで判断してはいけない。たとえ魅力的な『お菓子^{えさ}』を与えられても、知らない人に、ほいほいついていくほど子どもではない。

「じいさん、誰だ？」

ケンジロウは、強めの口調でそう言う。老人はにやりと笑った。

「そうじゃな、こんな怪しい爺さんに、誘われたら、誰でも警戒するわな」

彼ははからからと笑うと、白衣の胸ポケットから名刺を取り出して、二人に渡す。

その名刺にはティラノサウルスの頭蓋の化石がうつすらと印刷されており、その上に「恐竜博士 Dr. タカギ」と、書いてあった。それを見て、ショウとケンジロウの二人は目を丸くした。

「タカギって、あの？ 有名な？」

どうりで、どこかで見たことがあるはずだ。二人は彼の書いた本を、何冊か持っている。彼は、恐竜の生態に対して、いくつもの新説を提唱した有名な恐竜学者のひとりで、今は、第一線の現場からは退いているという話を、噂で知っていた。

「有名かどうかは分からぬが、そうじゃ、恐竜学者のタカギじゃ。実は、この近くで小さな趣味の化石館をやっておる。気が向いた時

しか開けていないから、訪れる客は誰もいないがな」

「完全に、老後の趣味だな……」

ケンジロウのその言葉を聞いて、タカギ博士は笑い声を上げた。

「ずいぶん元気なじいさんだな」

「だね」

二人の警戒は、すっかり解けていた。

「まさか、こんなところで、タカギ博士に会えるとは思ってもいませんでした」

「はっはっは、人の縁とは、どこでできるかわからんからな。……
そういえば、まだ、君たちの名前を聞いていなかったな」

「僕は、楽谷らくたに 翔しょうです」

「俺は、新城あらき 賢次郎けんじろうだ」

少年たちは博士を信用し、名前を名乗った。

夢見る化石（こんせき）（後書き）

ちなみに、恐竜マニアならば、一度は訪れたい博物館は、「福井県立恐竜博物館」のこと。自分も、行ってみたいと思っている博物館なのです。

小さな博物館の秘密。

「これは、すごいな」

ケンジロウは、感嘆の声を上げた。それは、珍しい化石を見てあげた声ではない。化石を見た時の感動よりも強い興奮が少年たちを満たしていた。

もちろん、タカギ博士の博物館には、すばらしい化石の数々が展示されていた。恐竜のものだけではなく、アンモナイトや、サメの歯なども、きれいに分類され展示されている。いくつかはレプリカではあったけれど、本物と見間違えるほど精巧な模型で、どのような形でその化石が発見され、復元された場合はこのような姿だっただろうと言うことがわかるようになっていた。その化石についての書かれた解説も分かりやすく書かれており、さすがは、名を世間に轟かせた有名博士の作った博物館と言ったところだろう、下手な博物館の展示より、情報が充実していた。

「実は、地下の部屋に、もっとすごいものがあるのだよ」

タカギ博士は、化石を見ては感動の声を上げていた二人の子供たちに、ころあいを見て、そう話しかけた。

「すごいもの？」

「地下に、何があるんだろうな」

「秘密の発掘現場とか？　しかも、ほぼ完璧にそろってる化石が眠っているとか？」

「もっと、すばらしいものだよ……」

博士は、もったいぶるように、言葉をためる。

「すばらしいもの？」

それとともに、子供たちの期待は膨らんでいく。

博士は、好奇心に彩られた少年たちのその様子を、目を細めながら、ほんの少し笑みを浮かべて見つめ、一呼吸おいてから口を開いた。

「それは……タイムマシンじゃ」

「タイムマシン!？」

博士のその発言に、二人の声が重なった。タイムマシンが本当に時間を越えるのなら、生きた恐竜に会うこともできるのだ。そう思うと、化石を見ていた時のそのどれを見たときの比ではない興奮が、子供たちを襲うのだ。

「まさか」

「いやいやいや、そんなこと可能なの？」

博士の発言にさまざまな憶測が思い浮かぶ。

「このじいさん。すっかり、ボケているんじゃないか？」

「で、でもさ……博士の発表した新説は……何と言うのか……その根拠が、タイムマシンだとしたら？」

「だとしても、タイムマシンを発表しないのは、頭がおかしい」

ケンジロウは、きっぱり言う。

「……ひどい言い様じゃな……秘密の部屋へ連れて行くのやめようかの」

「い、いえ、信じますよ。信じます、信じていますとも」

ケンジロウは、あわててそう言った。

「ふむ。まあ、タイムマシンと言っても、今我々が過ごしている『現代』と、『恐竜の時代』しか、行き来できないがな」

「他の時代にはいけないのですか？」

ショウの質問に、博士は「うむ」と考えるそぶりを見せ、どう説明したものかと考えているようだった。

「……私が恐竜好きというのもあるが……この土地は……特にこの

場所は、恐竜の化石が数多く発掘される地層が多い。つまり、恐竜時代の記憶を強く持っている。私の作ったタイムマシンだと、恐竜時代に行き来するのが、一番安全なんだよ」

「そういうものなのか」

「そういうものなのじゃ」

しかし、限られた時代の往復しかできないと言うことが、現実味を帯びていて、なんとなく信憑性が増した。

「どうじゃ？ 興味があるじゃろう？」

博士の言葉に、シヨウとケンジロウは、迷わず頷いた。

「それでは、ついてきなさい」

二人の少年は博士のあとに続いて、黄ばんだ光を放つ蛍光灯の照らす廊下を無言で歩いていく。博士は、廊下の一番奥にある「関係者以外使用禁止」という文字の薄くなった張り紙された扉を解錠した。その奥にはエレベーターがあった。博士は、少年たちを中へ誘導し乗り込んだ。エレベーターは地下へと降りていく。

エレベーターを降りた先は小さな部屋になっており、エレベーターの扉以外に、もうひとつの扉があるだけだった。

「あの扉の先にあるのじゃ」

博士は、にやりと笑うと、扉の横にあるタッチパネルに、暗証番号を入力した。鍵が解除され、扉は自動的に開いた。そこは、博士が招いたものだけが、入る事ができる地下の秘密の部屋。

排熱するファンが回る低音がこの部屋には響いている。子供たちの目の前に広がっているのは、巨大な機械群。部屋の壁半分を覆う赤や黄や黒の一見乱雑に見える彩り豊かなケーブル、何かの移り変わりをあらわす光のメーターが赤に緑に上下している。その機械の上部には、太いパイプがつながっていて、それは天井を這い、部屋の中央に位置する円筒形の柱へとつながっている。

「これは、すごいな」

ケンジロウの顔には、感動が表れていた。彼だけではなく、ショウも、目の前にあるそれが信じられずにいた。

「本当に、これが？」

目がくらみそうになるくらい複雑な機械を目の前に、少年たちの心は興奮で満ちていた。

「この装置は多くの情報を同時に処理できるのじゃ。……各アプリケーションを同期して、かつ、アクティブにして高速に計算し……そして、同時にそのプロセス内に存在して、優先的にその実行を継続しつづける。……それぞれに世界を構築することによって、導き出された瞬間に、世界は時空を繋げる。その世界の選択肢が少なくなることによって、読み取って理解する概念が少なくなるのじゃ！」

博士はこの機械についての説明を簡単にしていく。説明によると、部屋の中央にある円筒状の柱の中に入ると時代を飛べるらしい。しかし、説明の大部分は、専門的なうえに早口な博士の言葉は難解で理解できなかった。あまりの感動で二人とも上の空だったということもあるのだが、博士は計算能力の高さを自慢したかったように思えた。二人の少年は、目の前にあるタイムマシンをしばらく無言で眺めていた。

「じいさん！」

ケンジロウは、博士のことを畏れなくそう呼ぶ。

「じいさんが、俺らを呼んだ本当の目的は……俺らを、実験台にするためだな」

「そうじゃ」

ケンジロウの質問に博士は、即答する。

「……だろうと思ったぜ、じゃなければ、こんなところにつれてくるはずが無い」

「な、なぜ、僕たち、ですか？」

「うむ。子どもたちに、この実験に付き合わせるのは申し訳ないとは思うのだが……大人の質量では、向こうへ飛ばすことは、まだ技術的に無理なのじゃ。重いものを向こうへ送ると……そうじゃな、最悪この場所にクレーターができる」

クレーターができる……つまり、大爆発が起きるということだ。二人が顔を見合わせていると、博士は話を続けた。

「安心したまえ、爆発はそう簡単に起きんよ。それに、当たり障りのない動物で何度も実験し、いずれも、無事に生きて帰ってきた。今も、元気に生きておるよ」

博士はそう言って、キーボードを操作する。画面に博物館の外や中の様子が、4分割で映し出された。そのうちのひとつを選ぶと、画面いっぱいになり替わった。そこには、種類が分からないが、茶色の大型犬が数匹いた。元気に走り回っている。

「私の愛犬じゃ。最近、無事に子を産んでな。記憶にも問題が無いし、遺伝子的にも問題なく過ごしておるよ」

「なんだか、話が難しくなってきたな。遺伝子って……」

学校では遺伝子の何たるかは、まだ基本的とも言えないおおまかなことしか習わない。シヨウとケンジロウの二人は、理科が好きな方であったが、遺伝子については中学理科で習う程度の知識にほんの少し色を添えた程度しかなかった。

「うむ、簡単に言うんじゃな、時代を超える時、体は粒子レベルまで細かくなって向こうで再構築されるのじゃ。こちらに戻ってきた時、それが以前と同じものかどうかの判別は外見的には難しいのじゃ。……記憶に問題が無く、子孫を残せる遺伝子があれば、観測できない程度の微々たる構築ミスは気にしなくてもいいと考えるのじゃ」

「何かその言い方だと、何らかの副作用はある言い方ですね」
シヨウは眉をひそめた。

「はっはっは、この世界に絶対は無いのじゃから副作用は無いとは言いい切れないが、それは癌になるのと同じような脅威でしかないよ」

「多少のリスクは、覚悟しなくちゃいけないということですか……」
ショウは、少し迷いが生じていた。しかし、ケンジロウの方はそうではなかったようだ。

「何かあったら、飛行機の大事故にでもあったと思ってあきらめるよ」

ケンジロウは、そう言った。飛行機事故は頻繁に起こるものではないが、起こってしまえばそれは「確実な死」を意味する。この危険を知ってなお人々は飛行機を利用しているのだ。このリスクを考へても飛行機から得られる利益が大きいからである。

「子供とは思えないほど、君はさめておるな」

「よく言われるよ」

ケンジロウはその言葉は聞き飽きましたよと言うように手をひらひらしていた。

「生きた恐竜を、見た初めての人類になれるんだ。俺はそれだけで、タイムトラベルの価値はあると思ってるぜ、じいさん」

「そうなのじゃよ。今まで飛ばした動物たちは、見てきたものを語れないからな。私が自ら見ることができればいいのだが、それができないのが悔しくての。あと20……いや10kg痩せていたらなこの体をはじめて恨んだものだよ」

二人は意気投合している。そんな様子を見ると、ショウもなんだか危険は些細なことのように感じてきた。

「生きた恐竜が見ることができ……」

この夢のような現実を実現させるために、多少の危険は冒しても悪くないかもしれない。男たるものの危険を恐れていては冒険はできないのだ！

「心配ならば、一度見てみるかい？　この生き物が向こうへ行って帰ってくるのを」

博士は、硝子の容器に入った黒い虫を見せた。テカリのある羽の生えた虫は、容器の中で長い触覚をセカセカと動かしていた。

「本当ならば、この黒い虫は、永久に向こうへ行ってもらおうかと思っていたのじゃが……」

「……虫と僕らじゃ、質量が違いすぎやしませんか？」

ショウは、その平べったい虫が少し苦手だった。無意識のうちにケンジロウの後ろへ移動してしまう。

「はっはっは、確かにな」

「ま、俺は、別に確かめなくても、かまわないけれどな」

「僕も、そう、思う……」

ショウとケンジロウは、博士に実験の必要はないと言う。

「先程も言ったが、この機械は質量制限がある。この機械では、せいぜい一人づつしか遅れないが、2回に分ければ、問題なく機能する。こちらの世界では、3　時間ほど機械を休ませる必要があるが、君たちが向かった先では、時間にあまり差がないように調整しよう……向こうでは、まずは3日間くらいすごしてもらおうかな。最初は、あんまり長くても、短くても疲れるだろうから」

「3日間、ですか。家の人に連絡しなくちゃいけないけれど、何て言おう……」

正直に恐竜時代に行くから3日くらい外泊するといった日には、強制的に迎えが来てしまうだろう。あるいは、最悪、警察か救急車（都市伝説に出てくる黄色の！）が来て博士が連れて行かれてしまうかもしれない。

「……その点なら、大丈夫じゃ。こちらに戻ってくるときも、数時間しか経っていないように設定できるから、今日の夕方にはこちらの世界に戻ってこられるだろう。心置きなく楽しんでおいで」

「タイムマシン、すげ〜な。でもどちらにしろ俺は、2・3日程度なら、家を抜け出すことはよくあるからな。連絡しなくても平気だ。それに、もし失敗して帰れなくなっても、俺には本当の家族とよべる人は、いないしな」

「ケン……」

ケンジロウには、両親がいない。彼は今、施設のようなところに住んでいる。

両親はきちんと籍をいれ子供も生んだものの、お互いが自分の時間を優先する性質だったらしく、父と母は一緒に住んでいなかった。ケンジロウはいわば母子家庭と言って良いような環境にあった。

しかし、母と父は仕事場が一緒だったようで、2人なりの愛で成り立っていると、子供心に感じていた。もしかしたら母に連れられて仕事場へ行った時に、ケンジロウは父に会ったことがあるのかもしれないが、その中の誰かを特別父親と認識していたことは一度も無かった。

そして、ケンジロウが幼いころに、母親が行方不明になった時も、父親はその時ケンジロウを一度は引き取ろうかと思ったらしいが、仕事場に寝泊りする日が多く面倒が見れそうに無いので、仕方なく親戚筋の施設で育てられた。父は全く会いにくること無く、ケンジロウは、父を知らぬまま今まで過ごしていた。

母親の写真は数枚残っているのだが、父親とはつきりわかるような写真やビデオと言った映像の記録は皆無で、ケンジロウは父親の顔を全く知らないで育った。ケンジロウのほうも写真やビデオは好きではなかったのも、もしかすると父親の方もケンジロウのずっと幼い頃しか分からない可能性もあった。

「ケンジロウ君、君は……。家族がいないって……。まあ、私も……。他人の家事情にとにかく追求できる立場ではないが……」

博士は少し戸惑っているようだ。まだ未成年の子供から本当の家

族がいないと聞かされて動揺しない人は少ないだろう。

博士は、ワザとらしく咳を一回し、口を開いた。

「……そうそう、言い忘れておったが、向こうに行くときは恐竜の姿になってもらう」

「え？」

博士の言葉に、二人の少年の目が丸くなる。

「やっぱり、頭がおかしいんじゃないか？ このじいさん」

タイムマシンだけならば、まだ許容できる技術だが、恐竜に変身と言うのは、あまりにも非科学的だった。

「いやいや、ちゃんとした理由があるのじゃよ。向こうの気候は、現代とは大きく異なっている」

「恐竜時代は、今よりも二酸化炭素が多くて温暖だというのは聞いたことがあります」

「そうじゃ、今よりも遥かに蒸し暑い。世界の多くの場所が熱帯のような環境といったほうがいいかな。それに食べ物を得るにしても、人間の体では狩りをする場合も限界があるし、草を食べたとしても消化吸収できる保証がない。人類にはちときつい環境なんじゃよ」

「なるほど」

恐竜へ変身する工程は、タイムスリップの最中に行われる。

時空を超えるとき、体は一度、原子単位のレベル、本当に細かくばらばらに分解されてから送られることは先ほど博士から聞いたが、向こうへついた時に、プログラムに組み込まれた恐竜の遺伝子情報を元に、体は恐竜として再構築されるらしい。むろん、現代に戻る時は、その逆の現象が起こる。詳しいことは省くが、そんな感じだ。遺伝子レベルで体が、完全に恐竜のものとして作り変わるの、当時の植物を食べても、おなかを壊すことなく、ちゃんと栄養として消化されるようにらしい。

「博士って、本当に天才なんですね」

「恐竜にならなくとも、時代は超えられるが、どうせなら恐竜になったほうがより楽しめると思ってな。片手間に遺伝子変換の研究もしていたのじゃよ」

「片手間にしては、凝りすぎていると言うか……」

「はっはっは。……さて、早速だが、なりたい恐竜を選んでもらいたい」

博士はリストを見せる。

「このあたりの恐竜ならば、今から行く時代の恐竜だから、食料や環境に合っているはずだ」

白亜紀の一番最後の時代に生きていた恐竜リストを、博士は二人に手渡した。10数匹の恐竜の名前が書かれていた。

「白亜紀後期でも、末期中の末期にいた恐竜ばかりだな」

リストを一通り見終わったケンジロウは言った。

「そうだね……どうしようかな……」

ショウは、1匹1匹の恐竜の復元図を思い出しながら、どの恐竜にしようか考えている。

「じゃあ、俺はテリズィノサウルス」

ケンジロウは、『大鎌のトカゲ』という意味を持つ恐竜を選ぶ。

前脚の大きな3本の鉤爪が特徴で、恐竜マニアからは、ナマケモノっぽいとよく表現されている。大きな鉤爪を持つてはいるが、植物食の恐竜である。

「僕は、ヘユアンニア」

ショウは、中国から発見された羽毛がある恐竜を選ぶ。

「ずいぶんとマイナーな恐竜を選んだのう」

「ティランノサウルスとか、トリケラトプスなんてのは、ありきたりだろう」

「ぼくは、純粹に鳥に似た恐竜が好きなんで……」

二人は、それぞれ選んだ理由を述べた。

「せめて、同じ恐竜にしたまえ。これから行く場所は、知らない場所、知っている人はいない場所。群れでいたほうが安全だろう？向こうへ行けば、常に危険が付きまとう。二人いれば、協力して乗り越えられると思うのじゃ」

「そうします」

話し合いの結果、二人は「ヘユアンニア」になって恐竜時代へ行くことにした。

小さな博物館の秘密。(後書き)

ヘユアンニア

全長…約1メートル

産地…中国(広東省)

食性…肉食

名前の意味…ヘユアン(広東省のヘユアン市)のモノ

歯のないクチバシを持ち、羽毛がある鳥っぽい恐竜。

多分、南国にそのような鮮やかな色で、頭部なんかには派手な飾りがあったんじゃないかと、勝手に想像。

テリズイノサウルス

全長…約12メートル

産地…モンゴル南部(ゴビ砂漠)

食性…植物食

名前の意味…大鎌のトカゲ

自分が好きな恐竜のひとつ。

タイムマシンに乗り込む。

タカギ博士は、タイムマシンを動かす準備に取り掛かっている。失敗のないように、神経質ともいえるくらい丁寧に機材のチェックしているようだ。

ショウとケンジロウは、博士が作業している間、彼から手渡された道具について語り合っていた。その道具とは、ライト付きの腕時計。恐竜の指でも扱えるように、スイッチとなる部分が大きめに作られており、操作が簡単にできるように細かいところが工夫されているのが見て取れた。そして、太陽光で充電もできる代物で、恐竜時代へ行く云々抜きで、欲しい一品である。

「人間は闇を怖がるからな、これはいい」

ケンジロウは、電灯のスイッチである時計の文字盤を押し、点灯させたり消灯させたりしている。恐竜の時代にはもちろん電灯というものはない。だから夜になると、星や月の明かりしかないだろう。現代の日本では、考えられない闇なのだ。

「これは、夜行性の動物に襲われそうになっても、目潰ししてその隙に逃げられるかもしれない。やつらの目には辛かろう。遠距離から攻撃できるな」

ケンジロウは、その道具を本来の使い道以外の事に使う方法を考えるのが好きなのだ。彼は唇を片方だけ上げ、不気味な笑みさえ浮かべている。この調子だと、襲われていなくとも試しにやっってしまうかもしれない。

「動物虐待は……よくないよ……?」

「大丈夫だ。正当防衛以外には使わん」

ケンジロウはそう言うが、未だににやけている顔のせいで、いまいち信用ができない。

「でも、恐竜によっては、このボタン押せなさそうだよね」

確かに、トリケラトプスやアンキロサウルスと言った4足歩行の恐竜が使うには、少し難しいかもしれない。

「彼らには、別の武器があるから大丈夫だろ」

「まあ、ぼくたちの変化する恐竜は、比較的器用そうな恐竜だから、関係ないけどね」

彼らが変身するヘウアンニアは、鳥に似ていると言っても、まだ指が残っているだろう。これくらいのものであれば、簡単に操作することぐらいできそうだ。

ちなみにこの時計は、仮に向こうで落としても、100年程度で完全に土に戻るエコ製品らしい。タカギ博士曰く「オーパーツを無駄に増やさない工夫」らしい。混乱を招くことはしたくないと言う、博士なりの配慮らしい。

「あの虫は、そのまま向こうに送っていたみたいだがな」

ケンジロウは、シヨウにしか聞こえないように小声で言う。

「あのさ……博士の言い方だと、あの虫……は、頻繁に実験台になっていたみたいだけれどさ……あの虫が昔から姿が変わっていないと言われているのはさ……もしかして」

「……博士が飛ばした虫が、向こうの環境にも適応してずっと、生き続けた？」

「だったら、おもしろ……くもないな」

シヨウは、自分で言っておきながら苦笑いする。シヨウは、あの虫が大嫌いなのだ。恐竜の時代に行っても、あの虫と遭遇する可能性がないわけではないのだ。

「博士のばか……」

シヨウは、あの黒い虫を実験に使っていた博士を恨みながら毒づいた。

「何か言ったかね？」

少し声が大きかったのだろうか、準備に夢中だったタカギ博士は呼ばれたと思ったらしい。

「い、いえ。恐竜時代に思いをはせて、どきどきしている話をしていました。博士の作業、はやく終わらないかなって」

シヨウは、あわててごまかした。

「そうか……もう、大体準備はできたのじゃが……」

博士は、部屋の隅にあるロッカーの中から籠を取り出し、二人の少年に渡した。

「服は脱いで入ってもらおうかな」

恐竜時代に服を送っても、汚れるだけだと博士は言う。下手をすると、尻尾のせいでズボンが破れてしまい、戻ってきたときに着れなくなっている可能性だってある。

「なんだか、恥ずかしいね……」

「オレは、気にしないけどな。……ところで、じいさん。もう準備はいいのか？ だったら脱ぐぞ？」

「ああ、いつでも」

ケンジロウは、躊躇わず（ためらわず）に服を脱ぎ捨て博士の用意した衣装籠の中に放り込み、さっさとタイムマシンに乗り込んだ。
「オレの準備はいいぞ」

「それでは、いくぞ！」

タカギ博士は、ひととき大きな赤色のボタンを押す。それと同時に機械たちは動作を始める。排熱用のファンがさらに勢いよく回り、各種メーターが今までとは違う動きを見せる。耳がおかしくなりそうな圧力の音無き振動が大きくなっていく。

そして、ケンジロウの入った円筒形の柱に、柔らかな粒子が集まって……そして、風が大気を流れていく感じとは異なる、まるで空

間そのものがゆがんでいくような変な衝撃派が柱を中心に放たれたかと思うと、あたりは一瞬で静まり返った。

先ほどまでケンジロウがいたはずのその場所には、もう何も残っていないかった。

「き、消えた……」

ショウは、見開いた目や開いた口がふさがらなかった。タイムマシンで別の時代へ行くと言うことは、この時代から消えると言うこと……頭では分かっていたが、実際に目の前で人が消えてしまうのを目撃するのは、驚嘆以外の何物でもない。

「ふっふっふ、成功じゃ。少し機械を休ませたら、次は君の番じゃ」「は、はい！」

そして、その3時間後、ショウもこの時代から消えた。

薫り集う、風が運ぶ。

闇に意識は砕け、体は粒子になっている。無数の意識と体は、あたりに散らばり、何か見えない力で攪拌され、循環の渦に沈むように、浮かぶように、漂っている。その散った欠片一つ一つに意思を感じて、全てを研ぎ澄ます。離れてはいけない、失くしてはいけない、組み立てなくてはいけない、間違えてはいけない……と。その輝く破片はたくさん、二重螺旋の内に、何かを形作っていく。

1つずつ丁寧に積み上げ、はめていき、それは、煌きながら鳥のような蜥蜴とかげのような形になった。その器の構成に使われなかった細やかな光は、その形の物に吸い込まれていく。最後の部品がはまったとき、ふと夢から覚めたように、それが自分自身であると不思議と認識した。そして同時に、世界は騒がしい世界に落ち着いていく。

暗闇に、光の筋が入る。それは、大きくなり、視界の全てを満たしていく。

……目を開いたのだ。

眩しさに、白く視界はぼやけていたが、すぐに見えるようになる。目の前には、羽毛に覆われた腕と、鱗に覆われた指、鉤爪が見えた。驚いて、その場から逃げようとするが、すぐに倒れてしまう。まるで酔っ払ってしまっただかのように、体の重心がどこにあるのか分からなかったのだ。

しかし、地面にぶつかった衝撃で、混乱していた記憶に、ひとつの事実を思い出させた。

『自分は、恐竜になったのだ』

目の前の鉤爪のついた指を動かしてみる。自分の思うとおりに動いた。これは自分自身の指、自分の新しい体。そうと分かれば、落ち着いて立ち上がるのみだ。慌てていては、できるものもできない。ふらつきながらも立ち上がる。鱗に覆われた見慣れぬ腕や脚は、思

い通りに動いてくれる。なんとか、なりそうだ。

立ち上がったところで、辺りを見回した。巨大な針葉樹の木々が空を覆っている。草むらには鳴く虫の声、飛び回る巨大な昆虫の羽音、ざわめく木々のそよぐ風。湿った緑の香りを含んで、自身の羽毛をやさしくなでて行く。静かではあるが、自身が溶け込んでしまいうようなほど、あまりに圧倒される力強い自然の息吹に曝され、ただ呆然と立ち尽くしていた。

突然、草の揺れる大きな音が背後から聞こえた。その音のした方を振り向くと、そこには大きな鳥に似た生物がいた。全体的に茶かった橙色で羽の先は黒い色をしていて、ところどころ白い斑点のような模様がある。頭の鶏冠部分には、黒と橙で構成されている羽飾りがあつて、その羽飾りが、今は警戒を表しているかのように大きく開いている。襲ってくる様子はないようだが、舐めるように観察している。

「ショウか？」

その恐竜は口を開いた。

「（恐竜がしゃべった？ いや、それよりも、この世界で、自分の名を知っているのは一人だけ）そう言う、君は……ケン？ だよね？」

外見上、目の前にいる生き物は、現代では見たことがない生物にしか見えないのだ。お互いがお互いの姿に、戸惑っている光景は、傍から見れば奇妙に映っただろう。

よくよく見てみれば、その恐竜の腕に羽毛に隠れ気味ではあるが見覚えのある時計のようなものをしているのが見えた。うまく羽毛の間に収納すれば、完全に隠すこともできそうだ。

「ああ、オレだ（……よかった言葉は、通じるみたいだな）」

ケンジロウは、恐竜になってしまったら、言葉が発せられないの

ではないかと危惧していた。恐竜になって、意思の疎通ができないとなると、何をしようにも不便だろうと思っていたのだが、どうやらそうではなかったらしい。ケンジロウは、ひとまず、ほっとしていた。

「……ええと、待った？」

いつまでも、恐竜となった姿に戸惑いを感じていては埒が明かないと、シヨウは話題を振った。

「ん？ まあ、5、6分と言うところかな。シヨウが来るちよつと前、空が奇妙な動きをしたんだ。なんていうのか、黒い雲が現れて渦巻くと言うのか、光が落ちたというのか……だから、この辺に現れたのだろうと思って、探していたんだ」

「そうなんだ」

シヨウは見上げた。今は空は青い。そんな異変があったなんて信じられないくらい空は澄んでいた。

「何はともあれ、無事に恐竜時代に来たんだ。堪能しようぜ。……まずは、こちら辺がどうなっているか見てみないとな」

ケンジロウは、そう言うのと近くの木を登り始めた。

ここが森のどの辺なのか、近くに川はあるのか、他に何か面白そうなものはあるのか、木々に囲まれていて分からないのだ。高いところへ行けば、少しは遠くまで見渡せる。どこへ向かうのかの目安に、木に登って地形を確認しておこうと思ったのだ。

「ケン、登るの早い」

シヨウも慣れないながらも、なんとか鍵爪を樹皮に引っ掛けながら、登っていく。人間の姿だったら、シヨウはおそらく全く上れなかっただろう。

「ショウ、頑張れ、もう少しだ！」

あつという間に、頂上に近い所まで上りきったケンジロウが、未だに下のほうで四苦八苦しているショウを見てそうつぶやいた。姿が変わったとしても、ケンジロウにとって、木登りは難しいことではないのだ。

「ふっふっふっ、孤児院から抜け出す時、部屋の窓から木に飛び移っていたのが、ここで役立つとは」

ケンジロウに、両親はいない。もともと、未婚の母で母子家庭だったのだが、その母も、ケンジロウが小学校へ行く年齢にも満たない時に、仕事へ行くといったまま行方不明になってしまったのだ。もともと、仕事が忙しく家にいないことが多かったので、「母親がいなくなった」と、同僚の人にきかされても、特に何の感情も起こらなかった。さびしくないといったら嘘になるが、孤児院に引き取られてからは、家に帰れば親代わりの人がいて、実はある意味で、家族がいることの安心感を得ることができていた。

彼は、母の記憶はおぼろげにあるものの、いつも忙しそうに書類をまとめている姿しか記憶になかった。ときどき、ひざの上に乗ることはあったが、母のしていることは、単調ですぐに飽き、本を読むなど自分の時間に使ってしまう。もっと、甘えておけばよかったかなと思うことはあるけれど、特に後悔はなく、可能ならば会えば良いなあと、思っている程度で、どこか悲しげな暗さを引きずっているわけでもなかった。

「わぁ！」

ケンジロウのいる場所まで登りきったショウは、乗っても大丈夫そうな太目の枝を陣取り、景色を見る。

「すごい景色だろ？」

今いる場所は、少し高くなっている丘のような場所なのだろう。緑の絨毯の先にある草原までよく見えた。地平線には、山脈まで見

える。

「あ、恐竜だ！」

そう、多くの人が思い描くであろう巨大な爬虫類が、木々の隙間から見える水辺では水を飲み、その向こうに広がる平原では群れを成して大地を歩いていた。木陰では、肉食の恐竜らしき家族がいた。きっと、お腹がいっぱいなのだろう、アフリカの自然公園のライオンのように、昼寝をしている姿が見て取れた。

地中^{かせき}に骨となって眠っているすでに絶滅してしまった生物、恐竜。その全身の骨全てが発見されることさえ稀で、はつきりとした姿形はもちろん、色や模様も、その多くは想像の域でしかない。その謎多き生き物たちが、目の前にいるのだ！

「本物の、生きている恐竜だ！」

広がる未知の世界を、木の上から垣間見た少年たちは、テレビでも見たことがない恐竜の雄姿、しかし、野生の何一つ偽りのない、ありのままの姿を目に焼き付けた。

期限が来るまでの3日間、少年たちは、この広い針葉樹林の世界^{もり}で生きていくのだ。

>i10736—312<

「そろそろ、樹から降りようか……なんだか、お腹が」

思い出してみれば、昼食を食べていないのだ。二人とも、タイムマシンで中生代へ行くということに興奮していて、すっかり食事というものを忘れていた。実際に、恐竜の時代へやってきて、だいぶ落ち着いてきた今、ほんのりお腹がすいてきたのだ。

「……ていうかさ、体は恐竜になったとはいえ、生の虫とか、生の

肉とか食べるのは、とても勇気がいるよね」

風に揺れる草木が、濃厚な緑の薫りをまとい、さざめいている。現代では、山の方に行かないとお目にかかれない深い木々が作る濃密な陰に、コケやシダが密生し深緑の濃淡がさらに深間ふかまに影を作る。

「キノコならどうだ？ あの毒々しいキノコとか？」

ケンジロウが指差す先に、それはあった。艶やかな傘、滑らかな柄、すべてが燃えるように真っ赤な色をしており、見た目からして危険そうな雰囲気しかなかった。辺りが緑であふれているために、その対比によって、ますます赤は凝縮され鮮やかに見えた。

「なに、そのベニテングダケもびっくりな色。食べたそばから毒に侵されて爛れ（ただれ）そんな感じ……」

シヨウは、ケンジロウの提案を却下した。

「それじゃあ、木の実とか？ この樹のとげとげの実！」

ケンジロウは、針葉の樹の上に生っている青白い鱗片に覆われた楕円形の実を指差した。たわわに実ったその実は、一見すると鶏の卵に似ていた。まるで鳥がそこで産み落とし忘れ去っていったかのように、煌々と日に照らされていた。

「いやだよ。松毬まつぼっくりじゃん、あれ」

「じゃあ……」

ケンジロウは、嬉々として目に付いたモノを次々にシヨウに提案していく。しかし、そのいずれも、食指が動くような造詣をしていない。

「わざとやっているでしょ」

「うん」

即答である。

シヨウはため息をついた。

「魚とか貝とかなら、生でもなんとか食べられそうだけれど……」

「じゃ、川に行くか」
川に行くまでの間、ケンジロウの「あれを食ってみろよ」攻撃は
止まらなかった。

薫り集う、風が運ぶ。(後書き)

濃厚な味の森にしてみました。(意味不明)

宣伝になってしまおうのですが、「夢見る竜は、宵に啼く石と化す」の没ネタを、「人は、その箱を開く猫? (短編集)」の「9の箱.. 鳥にならんとする子供」に載せました。

アドレスは、こちら。

<http://ncode.syosetu.com/n73341/9/>

興味があれば、そちらもどうぞ

原始恐竜人、誕生？

川と呼ぶには、あまりにも広大な……日本という小さな島国ではまずお目にかかれないう大河がそこに広がっていた。対岸が見えないくらい遠く、最初に見たときは湖か海かと思ってしまったほどである。

河の流れは穏やかで水深は浅く、澄んだ水の流れは太陽にゆらぎ、水面では光が幾何学的な粒子を作り出していた。

「きれいだね」

「だな……」

当たり前だが、空き缶もお菓子の袋も、何一つゴミが見当たらないのだ。

体験したことのない大自然の風景に、しばらく河の流れに見とれていた。しかし、美しい眺めはお腹を満たさない。二人の少年は今、お腹がすいているのだ。

底にある丸石が黒々と照らされて、岩陰では魚が煌めいた。それを見るや否や、今までの感動はいつたいどこへやら。

「魚がいるね」

「獲るか」

もはや、その魚を食べることしか頭にない二人の少年たちは、そっと河に入る。冷えた流れが鱗の足にしみわたる。コトリと固い石の感触が指の間をくすぐっている。

「川で水遊びなんて、何年ぶりだろうね」

「ショウは泳げなかったから、浮き輪して水辺でばしゃばしゃしていたな」

「もう、それは昔のことでしょう。今は、泳げるもん。一応……」
浮き輪が何かがあった方がいいけれども、という言葉は意図的に濁しておく。

「……じゃあ、いっちょ獲りますか！」

「うん」

手で捕まえようとしたが、さすがは魚である。濡れて滑らかな鱗が、捕まえようとする手から、するりと身をくねらせかわしていく。普通にただ狙っただけでは、捕まえる事ができない。

「ならば、最終手段だ」

ケンジロウは川底にあった拳ほどの石を、川の中に身をおく大岩に勢いよく打ち付けた。

しかし、力加減が弱かったのか、変化は見られなかった。ケンジロウは、何回かこの動作を繰り返した。すると、数匹の魚や沢蟹のようなものが浮き上がってきた。うまくいったようだ。

この手法は、現代においては、多くの川で禁止されている行為だが、今は非常事態のようなものだ。使っても怒られはしないだろう。

ショウとケンジロウは、水面に浮かぶ生物たちを両手に抱え、川を出た。そして、二人はさっそく『調理』にかかった。

「魚、おいしかったね」

川の水で洗ったとはいえ、血の味が残る魚の身は少し生臭かったけれど、自らの手で獲った新鮮な刺身は別格に感じた。とろけるような、それでいてしっかりと弾力のある引き締まった身は噛み心地も最高で、飲み込む時も滑らかに胃の中に落ちていった。

「毒のある魚が混じっていないくてよかったな」

「そ、そんな怖いこといわないでよ……」

「それにしても、血でべっとりだったな」

「……爪で、無理やりさばいたからね」

包丁やナイフといった刃物を持っていなかったので、自らの指についていた鋭い爪を使ったのだ。魚とはいえ、肉を裂く感触を直に味わうのは気持ちがいいものではない。ただでさえ加工されパック詰めされた肉しか馴染みがない現代人、狩りだとか、殺すだとか、そう言った血なまぐさい事からは程遠い生活をしていただけから。

「こちら辺に、丁度いい石がなかったからな。いい具合があれば、包丁か何かさくつと作ったのに」

指や爪に残っている魚の赤黒い血を川の水で丁寧に洗い流しながらケンジロウは言う。

「……狩の道具、何か作ったほうがいいな。石斧とか石包丁のようなものとか」

「そうだね。石と枝と蔦で……作れるんじゃないかな。無理そうなら、最悪、石や棒をそのまま鈍器にしたり、投げて使うようにすれば……」

いくら武器になる爪があるといっても、それを使って動物と接近戦をする勇氣は無いのだ。

「どこかに黒曜石があればなあ」

シヨウは学校で縄文時代についての授業をやっていたときを思い出していた。そのときに社会の先生が持ってきた黒曜石でできた石器が印象に残っていたのだ。先生が持ってきたのは、100円玉程度と小さな黒光りする石の欠片であった。しかし、それはカッターナイフのように、鋭く綺麗に紙を切り裂いたのだ。その切れ味にクラス全員が感嘆の声を上げるほどであった。

それで弓が作れば接近しなくとも小動物が狩れそうだが、弓は操作が難しそうだ。そもそも人間である時も使ったことがないのに、今は骨格が変わってしまった。おそらく恐竜の姿では、弓を引く動作は難しいに違いない。仮に黒曜石を見つけても、槍か包丁として使うのが現実的だろう。

「都合よくは、見つかるとは思えないけれど……」

黒曜石の産地はそう多くない。しかも良質なものが出てくるとなると、限られているのだ。

「まあ、とにかく。なんとか飯も食べたし、色々作ってみるか……」
二人の少年たちは、材料を求め森の中へ駆け出していく。

木々に囲まれた森の中、2匹の恐竜が向かい合っている。外見はこの時代に数多存在している普通の恐竜にしか見えないのだが、土の地面に様々な形の石や木を並べ、それらを手にとって何やら作業をしている様子は、この時代には似つかわしくない違和感をどこかに感じるだろう。

「……ああ、うまくいかない」

彼らは石斧を作ろうとしているのだが、うまい具合に仕上がらない。しっかりくりつけたと思っても、何回か振り下ろすうちに蔦が緩み、石が落ちてしまう。蔦の間から飛び出した石は、草むらの奥に転がっていく。

人間であったときとは違い、恐竜の指は細かい作業をするのが、なかなか難しい。

「人類がいかに指先が器用な生き物だったのか実感するよ。それに、すでに出来上がった道具が手に入るって、実はすごいことなんだね……」

「だな。いかに、現代が道具で満ち溢れていて便利だったかわかるな」

「先人たちの知恵と技術と器用さに感服だね」

「しかし、道具を作っている恐竜って、なんだか恐竜っぽく見えないな……」

ケンジロウは、目の前にいるシヨウを見て言う。目の前にいるその恐竜は、丈夫そうな蔦を縄代わりにして、木の棒に石をくりつけようと四苦八苦していた。ケンジロウも、同じ作業をしているので、シヨウも似たようなことを感じているかもしれない。

「俺たちや恐竜人間くてか？」

「まあ、その表現は間違っていないよね。外見は恐竜、中身は人間という意味で」

「外見がどうであれ、今まで道具に頼って生きてきた生物だからな。急に恐竜らしくといわれても無理だろう」

「家で飼われている犬や猫なら、見慣れているから、なんとなくそれっぽく振舞えそうだけれど……恐竜なんて、未来に生きている僕らには全くわからないしね」

恐竜は、化石になった骨の姿でしか見たことがないのだ。

「まあ、別に無理して恐竜になることもないだろう……？」

「でも、せっかく恐竜になったんだから、なりきってみたいよ」

「じゃあ、あの木にへばりついている小さなトカゲ、生きたまま丸飲みすれば、恐竜らしくていいと思うな、俺は」

鱗で覆われた顔の表情はわからないが、ケンジロウは間違いなく意地の悪い笑みを浮かべているであろうことは、容易に想像がついた。

「ぐ……恐竜になりきるのは、楽じゃない……」

2匹の恐竜は飽きもせず、作業を続けている。その間、肉食の恐竜に襲われるということも無く、のどかな森林の風と時だけが、彼らの周りを流れていく。

「石斧は、何とか作れたな」

二人がかりで1本を、どうにか作り上げることができた。実用に耐えうる物かどうかは、わからなかったが、気休めにはなるだろう。

何よりも精神的な部分で、何も持っていないより遥かに心強かった。

「他にも何か作る？」

2本目の石斧もなんとか完成させたショウとケンジロウは、次に作るものを考えることにした。

「火、だな。火を起こす道具も欲しいな。よくサバイバルでやる木と木屑でこすって火をおこすやつ。そうすれば、肉とか魚が焼けるし、動物除けにもなるしな」

山にある道具で火をつける事は、二人は小学生の頃に行なった行事で体験したことがあった。山を登ったり、カレーを作ったり、テントを張ったりは面倒で仕方が無かったが、火をつける作業は男子の誰もがやりたがった。登山や野外での料理も普段はできないことなのだが、火には不思議な魅力がある。自らの手で火を起こすという行動は、魔法を使うことに対する憧れにも似た感情を呼び起こし、ぜひともこの手でやってみたいという欲求に支配されるのだ。

「あれ、意外と難しいんだよね。この恐竜の姿で出来るかな」

「まあ、やってみないことには、始まらないが、うまくいくといいな」

「ケンは、そういうの得意だものね」

いろいろと試行錯誤してみるのも楽しそうだ。

「あとは……何があると便利だろう？」

「落とし穴はどう？ 確実じゃない？」

ショウは、原始人がマンモスを落とし穴に誘い石や槍で狩りをしている様子を思い浮かべながら言った。

「んー。道具もろくに無いから、深く掘るのも大変そうだ」

「しっかりとした落とし穴は、ちょっと難しいか」

「それに、俺らには獲物を落とし穴まで誘導する経験がない。……でも、すぐに使えるわけじゃないけれど、作っておけば勝手に引かかるのもいるかもしれない……。駄目もとでいくつか作ってみ

るか？」

「うん。……博士は、最初は3日だけ恐竜の時代へ行ってもらうと言っていたから、3日後に現代に戻っても、きっとまたここへ来ることになるだろうし、いくつか作ってみるのもいいかもね」

「少なくとも見積もっても、あと2日と半分は、この地で過ごすのだ。やれることはやっておいた方がいいだろうと、彼らは計画を立てる。

青い空に黄昏が迫ってきていた。

草むらの虫の声が鳴いている。時折、鳥とも獣ともわからぬ生き物の小さな鳴き声が風に乗って微かに聞こえる。それは、危機迫るものでもなく、虫や葉擦れの音と共に心地よい音楽となっていた。

恐竜達の生きたこの時代、夕焼けに響くカラスの声はまだ存在しない。白亜紀後期ともなれば、恐竜の面影を残しつつも飛翔できる小型の鳥は存在していた。しかし、空はまだ翼竜の支配下であり、鳥類は栄えつつあったが、まだまだ日陰の存在であった。

シヨウは夕焼けの色に染まる空を仰ぎ、そう思った。

「どうした？」

気がつけば、共に作業していたシヨウがふと手を止め、空を見上げていたのだ。

「……ていうか僕達、恐竜ぜんぜん目撃して無いじゃん！」

思い出したように、そう突然叫びだした。

「あははは。こんな道具づくりに夢中で、すっかり忘れていたな」

空を見れば太陽のある方角が、うつすらと黄みがかった色になっている。雲も傾いた太陽の光に照らされ、薄い空で赤や黄に染まっていた。数刻もしないうちに、夜になり、電気のない世界は、あっという間に闇に包まれてしまうだろう。

「仕方ない、今日はどこかで寝よう。本格的な恐竜探しは明日だ」

まだ、明るいうちに、安全そうなところを寝床を確保したかった。夜は、危険な肉食の生き物がうろついているかもしれないのだ。

「いい場所見つかるといいね」

木々が茂り視界も狭く塗装されていない道は、整備された環境に慣れている現代人にとって歩き辛い。木の根につまずかないように足元に気をつけながら、彼らは森の中を探索している。

「こんな日が沈むまで、半日近く、何やっていたんだか……」

ケンジロウは、瞳を閉じてため息をついた。

「どこで間違ったのだろう」

シヨウは首を傾げてみせる。

「最初に、腹が減っていたのが間違いだったのかもな」

「ああ、確かに……恐竜探しではなくて、食料探しやっていたものなあ」

もしかすると、視界の端に恐竜の姿を捉えていたのかもしれないが、食べ物のことしか頭に無いため、見えなかった可能性もある。

「恐竜時代にきたら、すぐに探検に行こう！　ってなって、食べることを忘れちゃうのかと思ったけれど。案外、そうはならないものなんだね」

「俺ら自転車移動で結構カロリー消費した上に、あまりに興奮しすぎて、木登りまでしたからな」

「さすがに、体のエネルギーはゼロ。食べ物のことしか頭になくなるか……」

空はすっかり夕闇に包まれ、太陽の沈む地平線の赤以外は群青色になった。寝床を探すために森の中を歩きはじめて数刻。予想よりも早く、その場所は見つかった。そこは小高い丘の麓で、草木の陰に隠れてそっと口をあけていた。

「洞窟だね」

「洞窟だな。使われていないようだったら、今日はここを使うか」
伺うようにそっと洞窟を覗き込む。入り口は、小さめだが、奥のほうは広くなっている。自然にできた穴のようだ。暗い洞窟内には、何も無かった。洞窟はそんなに広いものではなかったが、2匹が眠る分には十分な広さがあった。

「だいぶ、使われていないみたいだね」

「なんとなくだが、そんな感じがするな」

恐竜になったせいだろうか、臭いでわかるのだ。しばらく生き物がここにいたという形跡（におい）が無いということが。

「他に場所もなさそうだし、今日はここで休もうか」

「そうだね」

シヨウとケンジロウは、近くに生えていた身の丈ほどの草を、洞窟の土の地面に軽く敷いた。布団代わりだ。入り口も見つからないように、気持ち程度だが、葉を立てかけて隠した。

「今日のところは、これでいいかな」

シヨウは積まれた草に足の指先を押し込んで、具合を調べる。

「干してない取れたて新鮮だから、ちょっと湿っているけれど、なかなかいい感じだよ」

「それじゃ……」

シヨウとケンジロウは、互いに見つめ頷き合う。そして、「ひゃほおおい!」と、せいで草の山に飛び込んだ。

「草の布団だあ!」

彼らは、枕投げならぬ、草投げ合戦をはじめたので、ますます草が舞う。2匹は草まみれになった。

「羽の間に、草が入り込んだ!　なんか、ちくちくして、くすぐったい」

「ちょっと、暴れすぎだな」

身を振るい草を払い、散らばった草を再びかき集め眠れるように整えた。

「まあ、とにかく今日は休もうか」

彼らは明日に備え、早めに眠ることにした。

原始恐竜人、誕生？（後書き）

恐竜時代にせっかく来たのに、恐竜を探しに行かず、ご飯を食べ
て、道具づくりにいそしむ彼らは、変わっていると思う。

最初の目的も忘れて、興味の動くまま、思いついたことを思いつ
いたままに、熱中してしまう年頃なんでしょうね、きっと……

月の輝く夜に舞う。

「シヨウ？ まだ起きているか？」

ケンジロウは、横になったのはいいものの、興奮してなかなか寝付けなかった。そこで、向こうで同じく横になっているシヨウに小声で話しかけてみたのだ。

「起きているよ」

シヨウも同じく、眠っていなかったようだ。

「……夜の散歩しようか？」

少しの沈黙を破ってシヨウが言う。

「そうだな」

ケンジロウは、シヨウの意見に同意した。草を積み上げただけの布団から起きだし、彼らは洞窟の外へ向かった。

洞窟の外に広がる森の闇は本当に暗い。西の空の赤みが消え、空はすっかり夜の色だった。しかし、月明かりで予想よりも空は明るかった。

「それにしても、明かりが少ないのに、森が見えるってなんだか不思議な感じ。赤外線とか、見えているのかな」

この恐竜の目は、色は消えて赤外線カメラで見たときの映像に近い灰色の世界だが、困らない程度に暗視ができた。

「こんだけ見えれば、ライトはなくてもやっていけそうだな」

「そうだね」

空を見上げれば、木々の合間から見える空に月が大きくある。

「満月か……月はあんまり変わらないんだね。もうちょっと大きいかもと、思っていたけれど」

月は地球とともに歩み始めてから年に数cmづつ離れていっているということを知っていた。つまり恐竜の時代は、現代よりも近い

ところに月があつたということになるのだが、見た限りそんなに変わらないうように感じた。

「そうだな、案外変わらないものなんだな」

「6500万年程度じゃ、だめってことだね」

シヨウとケンジロウは、森の中を歩いていく。今まで、危険な気配を感じなかったので、おそらく危険な生き物は近くにいないのだろう。そう思えば、代わり映えのしない黒い木々の景色も怖くない。シヨウとケンジロウは、すっかり安心しきっていた。

何か小動物が逃げ去るときに揺れるかすかな草の音や、自らの足が踏んだ枝の折れる音に、どきりとしてしまうこともあったが、そんな些細なことに脈打つ鼓動も、それもまた新鮮で冒険心をくすぐっていた。ここで起こるすべてのことに、心が躍っていた。だから、ふと風に乗って、何か声のようなものが流れてきた時も、彼らは迷わずそちらのほうへ向かった。

「なんか、声が聞こえるよ」

「恐竜人間か！」

「まさか！」

声は変わらず、あの暗がりの向こうから聞こえている。シヨウとケンジロウのいるこの場所からだと思ひにしか聞こえないが、確かに声がする。彼らは、音を立てないよう気配を殺しながら、声のするほうへ足を向けた。声のする方向は、森の終わり、森の外だった。シヨウとケンジロウは草むらから、そつと様子をうかがった。

そこには女の子の恐竜が1匹と、少し幼い男の子の恐竜が2匹、合計3匹の恐竜がいた。小さな恐竜はまだ遊びたい盛りなのか、ちよつと進んで落ちている枝をくわえては放り投げ、ちよつと進んでは草をちぎり、なかなか積極的に帰えるそぶりを見せていなかった。

「あ、恐竜だ」

「恐竜だな」

はじめて、自分達以外の恐竜を見た感動。しかしそれを上回る衝

撃が走っていた。シヨウとケンジロウは、確かめるために、さらに3匹の恐竜たちの言葉に耳を傾けた。

「もう、何回言えばわかるの？ 早く来なさい。おいていくわよ」
女の子の恐竜が、少し苛立ちを見せながらそう言っている。

「ちょっとだけ、待ってよ」

恐竜たちは、日本語で、確かにそう言っていたのだ。

「恐竜がしゃべっているよ」

よくよく見てみれば、おそらく同種の恐竜だ。シヨウとケンジロウ、お互いに言葉が通じていたのは、中身が人間だからだと思っていたが、実は日本語をしゃべっているのではなくて、恐竜になり彼らの言葉を理解できるようになったのではないかと、そういう仮説を立てた。そういえば、彼らの性別やおおよその年齢も判別できた。恐竜の体になったことで、その恐竜に必要な最低限の能力が身についたのかもしれない。

「本当に、僕たちは恐竜になったんだ……」

「なんだか、夢見たいな話だな……」

言葉が分かるということもあり、シヨウとケンジロウは意を決し、あの恐竜たちに声をかけることにした。

「だれ？」

草むらから現れた気配に、女の子の恐竜は声を上げる。今まで少し離れた所でぐずっていた2匹の小さな恐竜は、その声を聞いて異常に気がつき、彼女にしがみつくように陰にすばやく隠れた。

彼女はつぶらな瞳をもつかわいらしい恐竜だが、今は警戒の少し陰しい顔つきで、シヨウとケンジロウを睨んでいる。

「僕らは、怪しい者ではないよ。森を散策していたら、声が聞こえたから……」

シヨウは、怖がらせないようにやさしく言った。

「あら、あなたたちは？ 見かけない顔ね……」

同種の恐竜だったので、安心したのだろう、少しだけ肩の力を抜いたようだ。

「わたしは、月の輝く夜に舞う娘、よ」と、彼女はそう名前を名乗った。

「月の輝く……夜に舞う……娘？」

二人は顔を見合わせながら、そうつぶやいた。まるで文章のような聞きなれぬ名前に困惑する。

「そうよ。で、これが、わたしの群れの子たちで、『草原を疾走す風の息子』と『春の初めに芽が吹く息子』よ」

「ボ、ボクは、草原を疾走す風の息子です」

幼いもののしっかりとした口調でそう述べた。

春の初めに芽が吹く息子と呼ばれた恐竜の子は、人見知りするのだろうか、未だに様子を伺いながらも、姿をあらわそうとしない。

「ええと、俺は、新城 賢次郎」

「アラキケンジロ……ずいぶん言いにくい名前ね」

「君たち風に言うならば……新しき城の賢い二番目の息子？ まあ、呼ぶならば、ケンでいいよ」

ケンジロウは、自分の名前を恐竜たちが名乗ったような感じに文章化したものを名乗った。

「ケン、ね。ずいぶん、短い名前ね……で、そっちの彼は？」

「僕は、楽谷 翔……ん……」

ケンジロウのように、すぐに名前は浮かばなかった。

（楽谷ってなんだよ……）シヨウは、はじめて、自分の姓に疑問を持った。

「ああ、こいつは……楽に谷を翔る息子、かな？」

ケンジロウは、こういうのが得意なのである。

「楽に谷を翔る息子……（あはは、この姿に、ぴったりだ）」

シヨウは、苦笑いを浮かべつつもケンジロウに感謝した。

「新しき城の賢い二番目の息子さんに、楽に谷を翔る息子さんね、よろしく」

「よろしくな」

「よろしくね」

「……月の輝く夜に舞う娘、か……カグヤって覚えておこう……」

ケンジロウは、そうつぶやいた。

「ケン、声に出てるよ」

「かぐや？」

聞きなれない響きの言葉に、彼女は首をかしげている。

「『輝く夜』と言う部分を使って、カグヤ。月の輝く夜に舞う娘さんの愛称みたいなものだな」

「愛称……カグヤ……不思議な響きね」

「愛称で言えば、俺はケンって呼ばれているし、こいつはシヨウだ」

「ふうん……ねえ、わたしのこと、カグヤって呼んで。わたしも、ケンとシヨウって呼ぶから……うふふ」

カグヤは、うれしそうに笑顔で言った。

「ぼくも、ぼくも。カグヤみたいなほちい！」

カグヤと親しく話していたこともあり、警戒や緊張がとけたのだろうか、春の初めに芽が吹く息子がケンジロウの周りを回って催促している。

「君は確か、春の初めに芽が吹く息子だったよな……メブキでどうだ？」

「ぼくは、メブキ」

まるで外国から来た子供が、漢字で自分の名前を書いてもらった後と同じような喜びようである。走り回りながら「メブキ、メブキ」と繰り返し言っている。

「ボ、ボクも、いいですか？」

「草原を疾走す風の息子だから……ハヤテかな」

「ありがとうございます。ハヤテ、速そうな名前です」

少し照れながらも、ハヤテは珍しさと新しさに、うれしそうに喜んでいようだ。

「そういえば、あなたたちは、遠いところからきたの？ 名前がとても珍らしいし……何よりも、名前の呼び方がいくつもあるし」

「うーん、そうだね。遠いといえば、遠いところから来たよ」

それは、距離的ではなく、時間的な隔たりなのだが。

「ああ、やっぱり、遠いところから来たのね。遠いところはことはちよつと違うって、そう聞いた事があるから。わたしは、そういうのに、初めて会ったけれど」

彼女は、納得したようにうなずきながら言った。

「へえ、そういうものなんだ」

恐竜の時代にも地方差というものがあることに驚いた。

「ところで……ケンとショウは、遠くから、来たって言っていたけれど、どうしてこんなところに？」

「まあ……群れからはぐれた、というのか。まだ、近くにいるとは思っただが……」

こういうアドリブ的なことは、ケンジロウが最も得意な事だ。

「群れからはぐれた。……だったら、見つかるまでわたし達の群れに出来ない？ 2匹だけだと、恐ろしい敵に狙われやすくなるから」

群れでいれば、それだけ生存率も上がる。このカグヤの申し出は、願っても無いことだった。

「おお、それは助かる」

「ぜひ、お願いできるかな」

「何かわからないことがあったら、聞いてね。群れが違うと色々約束事とか違っていたりするみたいだから」

シヨウとケンジロウは、カグヤの群れに、行くことになった。

カグヤたちの群れは、森から程近い草原に夜営していた。大半の者は休んでいるようだが、ちらほらと見張りの姿があるのが見えた。

「こんなにたくさん……」

「わたしたちの群れは、ここら辺では一番大きいのよ」

「へえ、そうなんだ」

「ここら辺は、食べ物も豊富だからね」

群れに近づいたとき、シヨウは見張りと目があった。一瞬、警戒の色を浮かべた瞳で睥睨されたが、カグヤというおかげか、それ以上のことはおきなかった。これだけ大きな群れなのに、部外者と関係者を見分けるとは、さすが見張りをするだけのことはあると、シヨウは感心した。

「……まずは、長に許可をもらわないとね」

カグヤは、メブキとハヤテを少し年上の恐竜にたくし、シヨウとケンジロウを長のいる場所へ案内する。

「深き白に凍みる赤き雫の娘さま、夜分遅くに申し訳ありません」

カグヤは、少し白っぽい鱗に、赤茶色の瞳を持っている女性の恐竜に話しかけた。もしかしたら彼女は少しアルビノが入っているのかもしれない。

この目の前の恐竜……なんというのか、出来る女って感じの雰囲気気が漂っている。これも、恐竜になったがゆえの本能的なものなのだろうか。この目の前の恐竜がなんとなく自分よりもかなり優れているような感覚に陥るのだ。

「深き白に凍みる赤き雫……白雪姫」

ケンジロウは、深き白に凍みる赤き雫と聞いて脳裏によぎった言葉をそっとつぶやいた。その声は隣にいたシヨウにしか聞こえないほど小さな声だった。シヨウもケンジロウがつぶやいた言葉の意味を察し噴出しそうになる。

「……ケ、ケン……た、確かにそういうイメージが浮かぶ名前だけれど……」

「しかし、白雪姫というよりは、白雪姫の継母って感じだよな……」

「ケン……一応偉い人みたいだから、それは」

「わかってるって……」

「ほら、ちゃんと話し聞かないと！」

シヨウはケンジロウをひじでつついた。

「……月の輝く夜に舞う娘よ。後ろの者たちは？」

見慣れぬ者に長の瞳が細まった。警戒とまではいかないが、シヨウトケンジロウの姿をその鋭い眼光で隅々まで観察している。

「はい。群れからはぐれたそうで、くらがりの森の近くで会いました……」

「……ほう。では、お前たちは、あの森に入ったのか？」

シヨウとケンジロウは、現代からこの時代へ来たときに、あの森にいたのだ。入ったと言うよりは、現れたといったほうが正しいだ

ろう。しかし、それを説明したところで理解してもらえとは到底
思えないだろう。しかし、森にいたことは確かなので、肯定の返事
をする。

「はい……森にいました」

その答えに、長の瞳はますます細まる。

「くらがりの森、か……これからは、あの森には入ってはいけな
いぞ」

「その……くらがりの森には、何かあるのか？」

「あの森は、化け物がいる……だから今後入ってはいけないぞ」

「化け物、ですか？」

「なに、大昔から伝わる、いい伝えだ。本当にいるかも分からん。

しかし、時々起こる不可解な現象があつた森には起こるのだ。確かに
あの森には何かある。どちらにしろ、あまりあの森には近づくな……

……

「わ……わかりました」

シヨウとケンジロウの二人は、そう返事をする。

長は未だシヨウとケンジロウを観察していた。まるですべてを見
透かしているかのような、この若い2匹の恐竜の本質がこの時代にな
いものと見抜いているかのような、そんな気分にはシヨウとケンジロ
ウの二人はなつた。もし人間だったら、背中につめたい汗を大量に
かいていただろう。しかし、恐竜に哺乳類のような汗腺はない。た
だ、ほんのり冷たい電気信号のようなぞわつとした感じだけが、羽
毛の間を気持ち悪くまとわりついているだけであつた。

「うむ、少し『毛色』が変わっているが……害意は無いようだ。よ
からう、この者たちを群れの一員として迎えよう」

「あ、ありがとうございます。よろしくおねがいします」

二人は、そう言葉を紡ぐので、精一杯だった。

「深き白に凍みる赤き雫の娘、さまって……なんか、こう……すごく迫力あるね」

「だから、群れの長ができるのかもね」

「そうだろうね」

「うふふ。見た目でそう思うかもしれないけれど、とてもやさしい方よ。今日は夜も遅いから休みましょう。日が昇ったら、群れのみんなを紹介するね」

こうして、シヨウとケンジロウはカグヤの群れに受け入れられ、1日目の夜は終わろうとしているのだった。

月の輝く夜に舞う。(後書き)

異世界召還でありがちな自己紹介。

「僕の名前は山田太郎、君たち風に言うならタロウ・ヤマダ。姓がヤマダで、名がタロウだよ」

……ていうようなことを、やってみたかった。

で……やってみた結果、こうなってしまった。

ちなみに、恐竜たちが名乗った名前が、あんな感じの名前になったのは、天才てれびくんの「恐竜惑星」の影響であると、ここで白状します。

その恐竜惑星には、「春の最初の満月の夜に生まれた最初の息子」と言う名前の恐竜人類（職業…哺乳類研究者）がいてね……結構、好きなキャラだったんだ。

久しぶりに、恐竜惑星のDVDでも見ようかな。

どうしても虫がたべられない

夜が明ける。

空にはまだ星々の輝きが残っているが、地平線は白く明らんで朝の色に彩る。静かに揺れる草原の海原では、夜のうちに冷えて露となった雫が草の端で香っている。

眠りから覚めた小さな動物たちが朝を告げる歌を歌い、未だ夢から覚めない者たちを現実の世界へと誘う。

その導きにより、シヨウは目は目を開いた。すぐ隣にはまだケンジロウが眠っている。夜、体温を下げすぎないように寄せ合って眠ったのだ。

羽が少ししつとりと濡れている。寝ている間に露がついたのだろう。シヨウは起き上がり身震いをした。羽についた水滴が大気に四散し羽が少しだけ軽くなったように感じた。

シヨウは夜明けたばかりの空の下少しだけ歩き回ることにした。

また起きるには少し早い時間なのか、眠っている者も多い。起きている恐竜と目があったときには、軽く頭を下げて会釈のような行動をする。それは人間だったときの癖なので、無意識下で行われた。そのあいさつに首をかしげる者もいたが、シヨウのほうはあいさつを返されたと言う認識をして、さして気にしなかった。

向うの方からやってくるカグヤの姿が見えた。彼女も気がついたようだ。シヨウの姿を見つけると駆け寄ってきた。

「おはよう、カグヤ」

「……おはよう。そろそろ起こしに行こうと思っていたところよ。よく眠れたかしら？」

「まあまあ眠れたかな」

外で眠ることは慣れていなかったの、ぐっすり熟睡とまではいかなかったが、眠気は取れる程度に休むことはできていた。

「ケンはまだ起きないみたいね」

「起こしてよようか」

「お願いできる？ わたしはハヤテとメブキを起こしてくるわ。そのあとに、朝のご飯を食べに行こうと思っているの」

「分かった、またあとでね」

「うん。こちら辺で待っていてね」

一旦、カグヤと別れケンジロウの元へ戻った。

「ケン、朝だよ。ご飯食べに行くって」

「ん、分かった。あと、5分」

ケンジロウはまだ起きる気配がなかった。

「よお、月の輝く夜に舞う娘。こんな朝早く、見かけない雄とどこへ？」

「月の輝く夜に舞う娘ちゃん、彼ら紹介してよ」

ケンジロウを起こし、ハヤテとメブキを連れたカグヤと合流して朝ごはんを探すために移動していると、男女の恐竜に声をかけられた。

「カグヤ、この朝からテンションの高い恐竜^{ひと}たちは？」

「ああ、彼らはね……」

カグヤに促され2匹の恐竜は名前を名乗った。

「オレは、朝に産まれ来る強い太陽の息子だ」

「あたいは、そぼ降る雨に水垂れ（みだれ）薫る娘よ」

また例によって、自己紹介タイムの始まりである。そして、シヨ

ウやケンジロウが月の輝く夜に舞う娘のことをカグヤと呼んでいるのを聞き、自分たちにもその愛称をつけてと言うのには時間はかからなかった。ちなみに、朝に産まれ来る強き太陽の息子はアサヒ、そぼ降る雨に水垂れ薫る娘はサミダレという愛称になった。

「今日は運がいいな、アレがいる」

アサヒが見つけたのは、樹液に群がる昆虫たちだった。

「食べる、食べるう！」

メブキが飛び跳ねて喜んでいる。

「それから、こういう枯れ木の中にいるんだよなあ……」

アサヒは枯れ木の皮を器用にはがし始めた。

「……地蜂（へぼ）の佃煮も苦手なのに、生きたままなんて無理だ……」

地蜂の佃煮はショウとケンジロウの住んでいる地域では一般的な昆虫を使った佃煮である。ショウは基本的に昆虫は平気なのだが（ただし「台所の黒光る虫」は除く）、しかしそれらを食すとなると話は別なのである。

「意外とうまいぞ、この虫。ぷりって言った後に、じゅわってクリーミーな感じが癖になる」

さっそく昆虫を食べたケンジロウは、事細かに虫の食感を伝えてくる。

「ケン、臆もせずよく食べれるね……うああ、あんまり、考えたくない」

虫が潰れていく様子を想像してしまいショウはなんともいえない感情に支配される。

「ショウは食べないの？」

ひとりそっぽを向いているショウを不思議に思ったのかカグヤが

話しかけてくる。

「こいつな、虫を食うのが苦手なのさ。今だってこっちを見ないようになっているだろ？ 見るのもいやなくらいに、虫を食うのが苦手なんだ」

「好き嫌いはよくないわ」

カグヤはシヨウにぷるんと太ったしろい芋虫を手渡した。

「ただ見ている分にはいいんだけれどね……」

芋虫に触れること自体はなんとも思わないので指先でつまんでみたものの、そのまま口にほうり込む勇氣はない。どうすることもできずに右に左に意味もなく持ち替えてしまう。

「シヨウ……食わないなら、オレがもらうぞ？」

「うん、いいよ」

シヨウはアサヒの口に投げ込んだ。

「僕は魚が好きなんだけれどね……」

昨日食べた魚の味をすでに恋しく感じているシヨウは、あとで川の場所でも聞いて、食べに行こうと思い始めていた。

「んー、ぼくはおさかながあんまり好きじゃない……」

「オレも」

メブキの言葉にアサヒも同意する。

「まだまだ、こどもねえ……」

サミダレはため息をついた。

どうやら、魚は大人の味ってやつらしい。

「この近くにおいしい草があるから、そこに行きましょうか」
ハヤテはシヨウの手を引く。

「草原を疾……いや、ハヤテもだんだん場所を覚えてきたな」

「当たり前です。もう、子供じゃありませんから。魚だって平気で
す」

「な……」

「あはは、アサヒったらハヤテに子ども扱いされちゃったわね」

ハヤテに案内されて、その草が生えていると言う場所にきた。その場所に着くと、一緒に来ていたメブキがつたない口調ながらも、おいしい草とそうではない草の違いを教えてくれた。

「こっちの草はおいちくて、あっちの草はあんまりおいちくないんだよ」

どれが食べられる草か、おいしい草かということは全くわからなかったのだ。メブキの説明は非常に助かった。

「教えてくれてありがとうメブキ。（僕たちって、この草食べれるんだね）」

「えへへへ」

ほめられたメブキは、次々に知っている草についての知識を疲労した。

「メブキは知っていることを何でも教えたい年頃なのね」

「じゃあ、いただきます」

抵抗はあったものの、虫よりはましだ。シヨウは草を食んだ。

「あ、案外おいしい」

体が恐竜になったおかげだろうか、味覚もその恐竜にあったものになっているに違いない。しかし、たとえそうであっても、精神的な面でやはり虫は食べられないな。体は恐竜になっても、心は人間のままだなと感じていた。そう思いながらシヨウは、ほんのり甘い葉をかみしめ飲み込んだ。

「彼らって、子供のお守りに向いている性格かもしれないわね」

カグヤは目を細めて彼らの様子を見ている。

「シヨウはとにかく、ケンも子供の扱いに慣れているのは意外だわ。ちよっと見直したわね」

「くくく、サミダレよりうまいんじゃないか？」

アサヒはサミダレをからかう。

「なによ」

「にぎやかだね」

シヨウは仲むつまじい雰囲気、恐竜の生活も悪くないと思う。

「そうだな」

「いつものことだよ」

メブキも「きゃきゃ」といいながら走り回っている。

こうして、和やかに朝食の時は過ぎていった。

「いっぱい食べた」

「メブキってば、食べすぎなんだから」

「そろそろ戻ろうか」

みんな満腹になり帰路に着く。

「そういえばあの森って、化け物があるって本当？」

シヨウの視界の端に森が映り、昨日、群の長が行っていたことをなんとなく思い出したのだ。シヨウは昨日この森にいた。その時は何もおかしいものは見かけなかった、見かけなかったのだが、少し何か不気味な違和感を感じていた。

「もしかして、あまり生き物を見かけなかったことに何か関係があるの？」

シヨウはあの森に感じていたことを聞いてみた。

「あの森……くらがりの森ね。あの森には、ずっと昔から生きている化け物がいるらしいのよ。凶暴な肉食獣でさえ、あそこには近づかないの」

カグヤはまるで怖ろしいものを見るように森を見つめた。

「何せ、肉食獣^{やつら}の大昔の長が森に近づかないと決めた最初だからな」
アサヒは、ショウとケンジロウが知らない新たな情報を話す。

「そうなんだ」

「ボクらも昔から入っちゃだめって言われているよね。ボクも少しあの森は怖いです」

「今の長も前の長も、あそこには何かあるって言ってね……」

ハヤテもサミダレもカグヤと同じような目で森をみている。その様子から恐竜たちの間では、あの森は本当に禁忌の場所として定着しているようだ。

「触らぬ神に祟りなしてやつか」

ケンジロウは思ったことを口に出す。

「？」

恐竜たちは顔を見合わせる。

「俺たちの群れ（くに）に伝わる言葉で、神……今の場合は森の主かな？ その森の主と関わりを持たなければ、災いを招くことも無いと言うことで……つまり、余計なことをしなければ、面倒は何も起きないということさ」

「確かにそうね。わざわざ危険を冒して行くこともないわね」

サミダレは納得したような表情で頷いた。

「あのな……実は気になって、オレこっそり、行ったことがあるんだけどよ……」アサヒがショウとケンジロウにだけ聞こえる声で耳打ちしてきた。「森の奥で、へんな生き物を見たんだ」

「み、見たって、なにを？」

ショウは息を呑んだ。

「変な形をしていたよ。しっぽもうろこも羽毛なくて、草が生えていて、黒いんだ」

「本当にいるんだな……」

ケンジロウは瞳を輝かせてアサヒの話を聞いていた。

「あれが、きつと森の主だったとオレは思う。なんだか本当に不気味な感じだったぜ」

「どうして僕たちに、そのことを？」

「昨日お前たち、長のところへ行つたろう？ あ森に入つたって言うじゃないか」

アサヒはただ森に入つたと言う共犯者^{なかま}がほしかったのだ。森に入つてはいけないと言われているにもかかわらず、好奇心で入ってしまった。怖い森の長に会ってしまった。誰かに言いたくとも、誰にも言えないでいたのだ。

「……オレが森に入つたこと、カグヤやサミダレには内緒だぜ」

「男の約束ってやつだね」

「おう、約束だ」

アサヒはすっきりしたような面持ちになった。森に入つたと言う仲間が出来たことで安心したのだろう。

群の野営地が見えてきた。

「わたしは、メブキとハヤテを預けてくるわ」

カグヤはいつものように小さな子供たちを群の中にある保育所のような場所へ連れて行くようだ。

「それじゃ、俺たちもこれで」

アサヒもサミダレと共に群の中へ消えていった。

「なんだかんだいって、あの二人……二匹は仲がいいんだな」

「しっぱもうろこも無い、か。そういえば……あの人類のような化石が出た時代は、今俺たちがいる時代だよな。もしかしたら、あの森にいる化け物って！」

「でも、必ずしもこの時代に生きていたって言うわけじゃないでし

よ？ 100年ずれていただけで、会えない可能性だって」

「でも、もしかしたらってこと、あるかもしれないぜ？ じゃなくても、似たものとか、痕跡は見つけられるかもしれないじゃん。絶対見つけるんだ。あの人類がいた証拠！」

ケンジロウのオカルト魂に火がついたのだった。

「会ってみたいな、その森の化け物^{ぬし}ってやつに」

どうしても虫がたべられない（後書き）

クロスズメバチ
地蜂

その名のとおり地中に巣を作る蜂のこと。岐阜の言葉で「へぼ」と言う。

森の主と遭遇す。

風が吹くと緑の草原に波が生まれ、消え、再び生まれては広がっていく。地平線に見える火山は黒煙を上げている。その付近を翼竜の群れが通過する。森の向こうからは、サウロロフス鶏冠竜の金管楽器のような低い鳴き声が聞こえてくる。おそらく、群れの仲間たちと日向でくつろいでいるのだろう。水溜りの水を飲むパキケファロサウルス厚頭竜親子や、トリケラトプス三角竜も、至福のひと時を過ごしていた。

ショウとケンジロウは群の滞在している場所を中心に周辺を探索した。もちろん、カグヤ、サミダレ、アサヒの3匹とともにして、色々案内してもらった。

「まったりしているね」

「そうだな」

近くに肉食恐竜がいなくてもあり和やかな雰囲気になり溢れていた。仮に肉食恐竜を見かけたとしても、離れた場所の木陰で寝ているのを見かけるくらい。おそらく彼らは満腹なのだろう。近づくのは怖かったので実行はしなかったが、生きた暴君竜は遠目から見ても、迫力のある強大な体つきをしていた。テランノサウルス暴君竜の小さな腕が気にならないくらい、その筋肉質の肢体はしなやかで力強い。

「やっぱり、本物は違うね」

「そうだな」

——彼らと仲良く過ごし、あっという間に時間は過ぎた。

「とうとう、明日が期限の3日目だな」

ケンジロウは、羽毛の下に隠してある時計を見て言う。

「あっという間だったね。……みんなにばれないように、群れから離れなくちゃ」

「俺たちの群れが近くにいないかどうか探しにちよつと出かけて来るって言えば、いいんじゃないか？」

「手伝うって言われたら、断れないじゃない。もしも、カグヤたちの目の前で消えちゃったら大変だよ」

「そ、そうか」

「次来た時に何か言われたら、草原の向こうに見た顔を見かけたよ
うな気がしたから、つい勢いに任せて追いかけてきたけれど、結局、見つからなかったから戻ってきた……とか」

いろいろ、想定して言い訳を考えていく。

「時間が来るまでどこか身を隠そうか？」

この時代から姿が消えるのだ。なるべく見つからない目立たない場所に隠れたい。

「だったら、あの森がいいかな。あんまり恐竜もよらないと言っていた」

ケンジロウは、例の森を指差した。

「化け物に会わなきゃいいね……」

ショウは得体の知れないものはあまり好きではなかった。

「ついでに、探してみるか？」

ケンジロウは森の主を現代で発掘されたあの化石と関係があると決め付けていた。

そして、夜の闇にまぎれ、まだ多くの恐竜が眠りについている中、ショウとケンジロウは、そつと群れから離れた。

「あの話聞いちゃうと、なんか不気味だよね」

夜の森は静まり返っている。カグヤたちが言っていたように恐竜たちの姿は全く見えなかった。

「明るくなるまでは、この前作った寢床の洞窟で休もうか？」

「それがいいね。いくら夜目が利くといっても、慣れていない森を歩くのは危ないしね」

シヨウとケンジロウは記憶を頼りに洞窟を探し、そこで日が昇るまで待つことにした。

日が昇り、空はほのかに曙光に染まっている。森の湿った空気は露の香りを含み、風とともに森の枝々を揺らしていく。葉々の隙間から漏れる陽光の柱はゆらぎ、地上に生えた草々をなでている。

早朝だというのに、シヨウとケンジロウは森を散策していた。もちろん森の主を探すためだ。怖いものと思われると思うてるシヨウはあまり乗り気ではなかったが、それでも、朝の日差しが森の暗さを和らげているので、それほど恐ろしさは感じなかったのが救いだった。

「何か形跡だけでもいいんだが」

ケンジロウは、茂みの下、岩の裏、木のうろに開いた穴、何も見のがすまいとあたりを注視しながら歩いている。その様子を後ろで見ながらシヨウも軽く森を見渡している。

ふと、シヨウは焦げ臭いような臭いを感じたような気がして立ち止まり周囲を見回した。

「なんか古い大きな木が向こうにあるね」

シヨウは木々の間から見えた立派な巨木が気になったのだ。まるでこの森の中心に生えているような、大昔からこの地を見守っているかのような風格が漂っているのだ。

「確かにあの樹は、いかにも森の主が住んでいそうな樹だな」

巨樹にはその中に何か潜んでいそうな穴が開いている。シヨウと

ケンジロウはその木がよく見える茂みに身を隠し様子を見ることにした。

「あ、あれ？ 枝にさ、何か干してない？」

シヨウに言われてケンジロウは、シヨウが指差したほうを見上げた。確かに枝に魚や木の実が吊るしてあった。自然発生的に魚が枝に干されていることなど無いのだ。何か知的な、しかも器用な生物がこの場所にいることは必至なのだ。

「それにこの場所、すこし焦げ臭いよ」

「そうだな」

先ほどから、風に乗って何か臭うのだ。

「焚き火でもしているのかな？ あ、ほら、あそこ。煙が見えた」
ここからは木の陰になっているのでよく見えないが、何かが燃えている。

「ちよっと、行ってみるか」

「待ってよ」

木々の陰に隠れながら、それが見える位置まで移動する。

そこには確かに火があった。今はもう消えかけで細い煙が空へと向かって伸びているだけだったが、石で囲んであることから日常的にここで火をたいていることが伺えた。

その焚き火の前に何かがいた。

焚き火の前にいた者は――植物で編んだような服を着ていて、黒い髪は長く後ろでひとつに束ねていた。まるで現代人のように直立二足歩行する女性がそこにいたのだ。

「……どう見ても人間だよね」

シヨウはケンジロウに同意の意見を求めたが、返事が無い。シヨウがケンジロウのほうを見ると、彼は瞬きもせずに、あの人間にか見えない生き物を凝視していた。

「かあ……」

ケンジロウは言葉を失っている。

「か？」

シヨウは聞き返した。

「かあ……かわいい？」

ケンジロウはそう言葉を続けた。

「なぜそこで、疑問形になる」

「し、しかたないだろ……」

ケンジロウはシヨウに顔を見られないようにそっぽを向いていた。

シヨウはその人間を観察する。長く野外で生活しているせいで身だしなみはきれいと言うわけではない。確かに綺麗な大人の女性だとは思うが、可愛いとは思えなかった。

（ケンジロウの好みはああいいう女性なのかな）

シヨウはそう思うことにした。

「ん、どこかに行くみたいだな」

しばらく様子を見ていたところ、彼女は手にかごのような物を持ち何か採りに行くような素振りを見せたのだ。彼女が去って、二人はチャンスとばかりに住処を覗きこんだ。

穴の中は特に何も無かったが、長年使っているようで手入れはされているようだ。よく見てみれば奥に蔦で編んだと思われるはしごが下がっていた。住居は上のほうにあるのだろう。

「やっぱり、ここに住んでいるんだね」

「そうみたいだな」

「あれがこの森の主？ 人間にしか見えないけれど」

「どうしてこんな所にいるんだろうな」

「この上に行けるか」

ケンジロウははしごに手をかけた。

「登れそうに無いな」

やはり恐竜の体では、このはしごを登るのは難しそうだ。

その時、小枝が飛んできた。ショウとケンジロウは振り返った。

「やれやれ、小型の恐竜でよかった。ほら、君たち、ここはあたしのなわばりだ。でてきたまえ」

耳に届いたのは、聞きなれた言語。驚いて振り向くと、長い棒を握った例の女性が立っていた。

「これ日本語だよな」

「だよね」

彼女は、間違いなく日本語で話している。

「あなたは、いったい」

「どうして、ここに？」

ショウとケンジロウは彼女に向けて問いかけた。

「そう、鳴くな。ここには何も無いぞ」

彼女から見たら、恐竜がはしごと戯れていたようにしか見えなかったのだろう。いまだに棒を振り回し威嚇している。

「あ、あの、聞こえていますか？」

「だから、鳴くな」

彼女には、僕たちの言葉は通じないみたいだ。恐竜のノドは、人の言葉を発するのには向いていないのだろう。恐竜になってしまったから、恐竜たちの言葉が分かり、発音できるようになった。しかし、恐竜になってしまったがゆえに、耳から聞く彼女が発する音を言葉として理解できるが、人の言葉が発音ができなくなってしまうのだ。

「色々聞きたい事があるのに！」

「悲しそうに、鳴いても何もやらんぞ？」

そうこうしているうちに、ふと意識が喪失するような、体から魂が乖離かいりしていくような、浮遊感のある感覚に襲われた。この感じには覚えがあった。

「こんな時に！」

ショウとケンジロウは顔を見合わせる。お互いの姿がうつすら透けて見え始めた。まるで霧のようにその姿は大気に溶けていく。こんな時に時間が来たのだ。

「！」

彼女は驚いている。あたりまえだ。目の前のものが、消えようとしているのだから。

空に浮かぶ雲が何かにかき乱されるように渦を巻き、静電気のような奇妙な気配があたりに舞う。

木々がざわめき風が吹く。

そして――静まり返る森。

そこには何も残っていなかった。

先ほどまで2匹の恐竜がいた場所には、奇妙な疵だけが残されていた。

「……完成させたのか」

その痕を見つめながら、確かに彼女はそうつぶやいた。

現代に戻ってきた。

気がつく、そこは草の生えた土の地面ではなく、無機質な白いタイルの床であった。天井では蛍光灯が光を発し、回るファンの音が耳に届く。

ショウもケンジロウも毛布に包まって、ぼんやりと床に眠っていた。のそりと起き上がると博士が声をかけてきた。

「お、気がついたみたいじゃな。調子はどうじゃ？ 二人とも、まだ少しぼんやりしているな……ここに服を置いておくぞ」

そういつて服の入ったカゴを傍らに置いてくれた。そういえば、向こうへ行く時に脱いだような気がする。ショウもケンジロウも、重い手つきで服を取り身にまとった。

「恐竜の時代はどうじゃった？」

着替えも終わり、二人の意識がはっきりしたところで、博士は尋ねた。

「恐竜の友達ができました」

二人は意図的に、あの森であった日本語を話す人間についての話題を避けた。ただ、ひたすらに出来た友人のこと、群のこと、食べ物のことを話した。

「恐竜になったおかげで、恐竜の言葉が分かります。なかなか大変おもしろい現象だな」

博士は興味深そうに話を聞いていた。

「――もう、こんな時間か」

時計を見ると18時を過ぎていた。

「あまり遅くなっても、親御さんが心配するじやろう？ 車で送る

う。そう思ってな、君達が乗ってきた自転車は、車に積んでおいた。
どこまで乗せれば良いかね」

博士に車で送ってもらうことになった。

「水波北中の校門前で下ろしてください。二人とも、そこから近い
ので」

18時過ぎとはいえ、夏は夜の訪れが遅い。まだ少し暁の色が残
る空を見つめながら、自動車は川沿いの道を走っていく。

「今日はありがとうございました」

校門の前で、自転車とともにおろしてもらう。

「明日も都合がよければ、迎えに行くが」

「ぜひお願いします」

「それでは明日の朝、この学校の校門前で待ち合わせじゃ」

「はい、分かりました」

「また明日！」

ショウとケンジロウは、博士と別れた。

現代ではほんの数時間の出来事であったが、恐竜時代で3日間を
確かに生きたのだ。明日、再び行くことができる恐竜時代への期待
を胸に、二人の少年は家路に着いた。

現代に戻ってきた。(後書き)

2010年12月、西日本から人間が消えた！ 東海地方に密かにつくられていたタイムマシンが暴走、爆発し、巻き込まれた西日本が白亜紀後期に移動してしまったのだ。

(しかも、そこにいた人間はすべて恐竜の姿になっていたのだ！)

そう、白垩紀に恐竜の種類が増えたわけは、恐竜に変身した人間たちが、大量に送られてきたからだだったのだ！

……という、うそ予告。

再び恐竜時代へ

次の日シヨウとケンジロウは、約束通り学校の校門前に現れた博士の自動車に乗って、タイムマシンがある博物館の地下へ再び訪れた。

昨日は体験と言う意味もこめて恐竜時代へ行ったのは、3日という短い時間であった。博士と相談した結果、今回の期間は一週間である。カグヤたちの群れに所属できたこともあり、もう少し長めに恐竜時代へ行っても大丈夫だろうと踏んだのだ。

前回は先にケンジロウが機械に乗ったので、今回はシヨウが先に恐竜時代へ赴くことにした。シヨウは円筒形の筒の中に入る。

機械音が世界を満たし、光でできた粒子が集う。あの無重力空間のような温かな世界を通り、身体は、意識は、再構築されていく。

——目を開けると見覚えのある森の中にいた。現代から恐竜時代に現れる場所と言うのは、この森の中と決まっているようだ。

簡単に姿を確認してみるが、今となっては見慣れた羽毛が体全体を覆っている。2回目となる時間の移動も問題なくうまくいったようだ。

「ケンジロウはそろそろ来るだろうか」

待つこと数分。

雲ひとつ無かった空に、渦のような物が現れた。帯電したように渦と渦がすれて静かな稲光が走る。そして、大気に緊張が走ったかと思うと空は元の通り青い色をたたえそこにあった。

「すぐ近くだな」

シヨウはケンジロウが現れたと思しき場所に向かった。

「とにかく……いったん、カグヤたちのところに戻ろうか？」

ケンジロウと合流したシヨウはそう提案する。

「そうだな」

前回、消える間際に会ったあの『存在』の事は気になるが、今行っても意思の疎通ができないのだ。何かいい案が浮かばない限り、あの場所へ行っても何も進展があるとは思えない。でも、できれば、早いうちに接触したいと、二人は思った。

近くに他の恐竜がいないか確認してから森を抜け、カグヤたちがいる群れに合流した。

「どこ行っていたのよ。今日は暗がりの森の空がおかしかったし、朝から二人の姿は見えないし……でも、本当に良かった、安心したわ」

カグヤは安堵の表情を浮かべてそう言った。

「どうやら、恐竜時代においては、数時間しか経っていなかったよ
うだ。」

「ちょっと早く目が覚めちゃったから、散策していたんだ。僕たちの群れが近くにいないかどうか探すことも含めてね」

どこへ行っていたのかと問われたときに言う決めていた台詞を、
ここぞとばかりに使った。

「二人は、朝ごはん食べた？」

「ちよつと食べてきた」

「俺はまだ」

「じゃあ、みんなで食べに行きましょう！」

「うん」

さあ、今日も一日、恐竜の生活が始まりだ！

ご飯を食べれば、見張りや子供の世話といった仕事がない者は、あとはのどかな時間が訪れる。昼寝をするもよし、走り回るもよし、自由な時間が待っている。

ハヤテとアサヒといった小さな子供たちは虫を相手に鬼ごっこをしている。跳んでは器用に軽く銜えた。そして、虫を放すと、虫は再び空を飛ぶ。それをまた、捕まえるのだ。何度か繰り返し、その遊びに飽きると、虫を、お腹の中に入れてしまう。

その様子を見ながらケンジロウは、ぼんやりと考えていた。

森の中で見た彼女と、なんとしても、話したい。コミュニケーションとる方法ないものかと。

恐竜の姿にならないで人間の姿のままこの時代に来れば解決するだろうが、だけれど、人の姿で行きたいといったら、博士にきつと感づかれてしまう。ケンジロウはなんとなくだが、彼女の事は博士には内緒にしておきたかったのだ。

それに確信はないものの、なにやら、博士には裏がありそうなのだ。そう、たとえば、恐竜の時代へ行って帰ってこなかった者がいる……とか。

虫や動物では成功したかもしれない。しかし、人間で実験した時、それが失敗に終わったら、これから乗ろうとする人間にそれを言うだろうか？ いや、言わないだろう。実際に博士は「生きた恐竜を見た初めての人類になれる」と確かに言っていた。その言葉が好奇心旺盛な子供の心に火をつけるための誘う文句だとしても、明らかに隠す意志があったのだ。

自分たちの以前に恐竜時代へ飛んだ人間がいたかもしれないという事実を得たと博士が知ったら、博士はどうするだろうか？ 嘘をついていたことわびるだろうか、それとも、恐竜の時代へ送り戻ってこれないようにして証拠隠滅を図るだろうか？

自分たちの場合、1回は成功している。しかし、だからといって、今回もまた帰れるという保証はない。ケンジロウは別に現代にも帰れなくなっても問題はなかったが、シヨウはそうはいかないだろう。帰れなくなったとしたら、うろたえるのは目に見えている。

「最悪のことばかり考えても仕方ないか」
そして思考は再び、彼女と意思疎通を図る方法の考案へと戻る。

「ああ、いい考え浮かばない。頭痛くなってくるよ!」
ケンジロウは、羽の生えた腕で頭をかく。

「頭いたいの? だから、ぼんやりしていたのね? 大変、ゆっくり休まなきゃ」

ケンジロウの声が聞こえていたのか、カグヤが心配そうにそう言った。

「いや、ごめん。大丈夫だよ」
そういう意味の頭の痛さじゃないしね。

「そうだ、確かあれがあったはずだわ。ちょっと取ってくるわね」
カグヤは何かを思い出したように、走り出す。

「これを少しなめると、頭痛は治まるわ」
少しして戻ってきたカグヤは、こぶし大ほどの土の塊を持ってきた。

「これは、何?」
どう見ても、泥の固まった土にしか見えない。
「少し削ってなめてみて、頭痛なんてすぐ治るわ!」

ケンジロウは、土の塊を爪で少し削りおそるおそるなめてみる。
「しょっぱい。これ塩?」

「塩?。」

「こういうしょっぱいものは、塩って呼んでいるんだ」

現生の動物も、ミネラル補給のために、塩の混じった土を舐めるという行動をするものがある。恐竜もそうであってもおかしくないのだ。

「なんか、治まってきたよ……ありがとう、カグヤ」

ここは直ったことにしておかないと。

「よかった。これはここにおいておくから、また頭が痛くなったらなめてね」

「本当にありがとう、カグヤ！」

（あ、思いついた！ 彼女と話す方法！）

塩のしょっぱさが刺激になったのだろうか。塩の含まれた土を引掻いたという行動をしたからだろうか、ケンジロウは、いい方法がふと脳裏に思い浮かんだ。

「筆談？」

その日の夜、ケンジロウは早速ショウに、その案を言う。

「この恐竜なら、鉛筆を持つ事はできなくても、ある程度の太さの枝なら、握る事くらいできるし」

「それだ！」

二人は地面に文字を書いて、筆談計画を実行することにした。

「この闇ならば、この前みたいに森までは行けるね」

「初日に、隠れられる洞窟見つけておいて良かったな」

「そうだね」

ショウとケンジロウは、今回も前回同様、闇にまぎれて森へ行くことにした。

きれいな、おねえさんは、すきですか？

夜が明けた。

シヨウとケンジロウは森の主と対峙していた。彼女の方も前回と同種の2匹の恐竜が現れたこともあって、今度は追い払おうとはせず、様子を伺っていた。

シヨウは手に持っていた枝を使い、地面に文字を書く。

『あなたはだれですか？』と地面には汚いながらも、そう書かれていた。

「やはり……こちらの言葉は、分かるのか？」

彼女はそう言ったので、二人は頭を上下に振って肯定の行動をとる。

「うむ。あたしは、チカ。あなたたちは？」

『らくたに　しょう』

『あらき　けんじろう』

漢字は書きにくいので、ほとんどひらがなになってしまふ。

「らくたに　しょう君に……あらき……けんじろう……君？」

このお姉さんは、シヨウとケンジロウのほうをじっと見ている。

「ここであつたのも、何かの縁だ……あなたたちはタカギの……その博士のタイムマシンで？」

シヨウとケンジロウは頷いた。

「やはりそうか。ちなみに西暦何年から来たんだい？」

『2011年』

「……そうか、あれの完成までに、さらに10年程かかったのか。

じゃあ、タカギは、ずいぶん老けただろうね」

そう楽しそうに言った。

「感づいているかもしれないが……あたしはね、あのタイムマシン

に乗った人間だよ。しかも、一番最初の。動物実験は成功していたんだけどね。人間での実験は、この通りさ」

草で編んだと思われる服のすそをつかみ、それをはためかせた。

「しかし、残念だったな。もう少し早い時期に来ていれば、あたしは一日中全裸で過ごしていたのにな。今は、少し羽織らないと少し肌寒い時期になったよ……ああ、でも、こんなばあさんの裸見てもうれしくは無いか」

彼女はからからと軽快に笑う。

彼女は自身を「ばあさん」と言っていたが、日に焼けた健康的な肌は艶やかで、長い髪は草のリボンで高い位置にひとつに束ねられて、ちらりとのぞくうなじ色香が何とも言えない。「大人のおねえさん」にしか見えない彼女の、しかもその「全裸」と聞いて、思春期真っ盛りのショウとケンジロウはため息の出るような感情が、奥底からわきあがってくるのを感じた。ざわめく情緒が爆発しそうだった。

どうしてくれよう、このきもちはい

『じゅうぶんに、きれいな、おねーさん、ですよ』

枝を折りそうなくらい強い筆圧で文字を書いてしまう。

「あはは、うれしいね。しかし、実際、あたしはもう長く生きたし、ずっと一人だったからな。心はすっかり孤独なばあさんかもしれない」

『そんなふうには、見えません』

どう見ても20代、多く見積もったとしても30代前半にしか見えなかった。

「君たちがそう思うのも仕方がない。実はね、私も恐竜になってこへくるはずだったんだよ。しかし遺伝子を組みかえるときの事故か、時空を越えるときの事故か、恐竜にならずに、ここへ来た。そのせいなのか、どういうわけかあたしは老化しなくなったんだよ。

テロメアの構造の変異がおきたのか……ああ、テロメアというのは、簡単に言うとDNA上にある細胞の寿命を司る部分で、細胞内で修復が行われるたびに短くなっていくものなんだ。ある程度短くなるとその細胞は正常な分裂をしなくなる。人の細胞はそうやって老化していくんだ。ただ、老化しないというだけであって、不死じやない。食べなきや飢えるし、この世界に来てすぐはおなかを壊して、死に掛けたこともある。でも、この姿のまま生きているんだよ。他にも、微々たる変化は起きているだろうが……これは偶然が生んだ、奇跡だ」

『なんねんくらい、いきているの？』

「それは分からない。しかし、数十年は経っているように思う。下手をすると100や200いつているかもしれない。5・6年ほどは、日が昇ると印をつけていたんだが、今となっては、朝か昼か。暑いか寒いか。雨か晴れか。そして、時々思い出したように、月の満ち欠けの様子見る程度しか気にしなくなってしまったのだよ。……当時のことを思い出せる証拠は、この指輪くらいか」

彼女の左手の薬指にはくすんだ金色の指輪がしてあった。

その場所に指輪があると言うことは？

シヨウは驚きのあまり声が出なかった。持っていた木の枝を落としそうになるくらい驚いた。

『けっこうんしていたんですか？』

シヨウは地面に書いた。

『タカギはかせを、うらんでいないのか？』

ケンジロウは、それが聞きたかった。

「恨んでないと言えは嘘になるけれど、どちらかといえば感謝しているかな。失敗は一応予想かくこしていた。そう、だから、結婚したんだ」

『相手の人は、それでなっとくしたんですか？』

僕は地面にそう書く。

「ああ、相手はタカギだからな」
彼女は驚きの言葉を言った。

「え、えええええ！！ 博士と？」

ああ、そういえば、博士も指輪していたな。金色の結婚指輪を。
「そう、吼えるな」

彼女には恐竜の咆哮にしか聞こえない。

『あんな、じいさんと？』

「君たち知っているタカギと、あたしがまだあの時代にいた時のタカギとでは、時代が違うだろう。あたしがこの時代に来たのは西暦の2000年だ。君たちは2011年から来たといった。10年もたてば、人は老けてしまうものだろう？」

「それでも、十分、じいさんだと思うが……」

「だよね……」

シヨウとケンジロウはそうつぶやいた。

「まあ、タカギには内緒にしておいてくれ。彼は、ああ見えて純真だからな。私はもう死んでいるんだ。6500万年前も昔に」

未だに金色の指輪していたものな、博士……

森の主は、現代から恐竜時代に飛ばされ帰れなくなった人間であった。

彼女と話しているうちにケンジロウの脳裏に、ひとつの仮説が思い浮かんだ。

「あの化石、やっぱり彼女の骨なんじゃないのか」

6500万年後発見された人骨のような化石は彼女のものなのではないかとケンジロウは思った。

「まさか」

「だって、時代も、場所もちようどじゃないか」

そうなのだ。この場所は、6500万年後、謎の人型の化石が発見された河原の近くであり、博士の研究所の近くなのだ。彼女の他に現代人の姿のままこの時代に送られた人物がいらないと言い切れないが、彼女である可能性は高いように思えた。

「わあ、なんか歴史的瞬間に立ち会った気分だね」

彼女に恐竜の言葉が通じないことをいいことに、現代で発見された謎の化石について語ってしまう。そんな様子をチカは楽しそうに眺めていたのだが、あまりに楽しそうに見えたので気になってしまったのだろうか、話の内容を尋ねてきた。

「あたしも、その会話に混ぜてほしいものだな。鳴き声にしか聞こえないのだが、すごく楽しそうに聞こえる」

彼女のその言葉に、シヨウとケンジロウは相談する。

「どうする？」

「まあ、いいんじゃないか？ 彼女、あんまりこだわらなさそうな感じだし」

見た目よりも長く生きているからだろうか、何か生き方に達観した雰囲気があるのだ。

『チカにとって、あまり、いいはなし、ではないよ』

「かまわないさ、あたしは子供じゃないんだ。それに最近生活が停滞気味だったからな、ちょっと変わった刺激がほしいんだ」

彼女にその話をすることにした。

『げんだいで、あなたの化石らしいものが、きょうりゅうじだいの

ちそうから、さいきん、はっけんされて、さわぎになっている』

「そうか、あたしは恐竜と共に人生を終えるかもしれないのか……
本当ならば、ある意味すばらしいな。まさかそんな形で現代の空気を吸えるなんてな。ふふふ、なんだか自分の死を予言されているみたいだ」

彼女は面白い冗談を聞いたときのように、ふるふると体を震わせて笑っている。

『よげん、よりもたちが、わるいですけど』

あれは、必ずやってくる歴史なのだから。

『そうしきも、してもらえないしな』

「ま、今さら死ぬことが分かったところで、どうと言うことはないよ。ふふふ、あたしの死体を学者様にさらすわけか。きっと大事に扱ってくれるだろうな。うん、悪くないな……ああ最高、あたしの人生最高だわ」

彼女は変わっている。だから、この危険なタイムとラベルの実験を引き受けたのか、なんとなく納得してしまった、ショウとケンジロウであった。

あまり長居をしても、カグヤたちに心配をかけてしまう。

もう少し色々話を聞きたかったが、地面に文字を書いて会話をするとするのは、案外時間がかかるもので、日がだいぶ高くなってきたのだ。名残は惜しいが、ショウとケンジロウは帰ることにした。

『ぼくたち、かえります。このじだいの、ともだちに、しんぱいさせてしまうので』

「ああ。また、いつでも来るといい。あたしは、大抵この周辺にいるから」

長の昔話。

シヨウとケンジロウは、森を抜けた。

いつものようにあたりに注意しながら、こっそりと群れに戻る……はずだったのだが、彼らに声をかける者があった。

「……やはり、お前たちは森の何かと関わりのあるものだったのだな」

長が待ち構えていた。どうやら森へ入るのを見られたらしい。

「お、長」

「……森の中で何をしていた？ あの森には何がある？ いや、……お前たちは森の上空に現れる乱れと関係があるのか？ あの空を見た後、時々お前たちのように見たことも無い者が現われるのだ。そして、彼らは総じてあの森を気にかける……」

「彼ら？」

「そう、昔、聞いたことがあるのだ。あの森の秘密にまつわる話を。あの空の向こうからやってきた者たちの話を……」

長はどこまで知っていと言うのだろうか。

「ワタクシの祖父がそうだったのだ。祖父は言っていたよ。もし。空がおかしくなった後に、この付近をうろついていて困っているような見かけない同胞は助けてあげなさいと。彼らは、みな、自分の群れに帰れないかわいそうな者なのだからと。お前たちもそうなのか？ 祖父と同じように空の向こうから来たのか？」

「……」

シヨウとケンジロウは、どう答えていいのかわからなかった。

「言えぬのならば、それでもかまわない。祖父も詳しいことは話したからなかったのだ」

「その……長の祖父は今？」

もし生きていたら、話が聞きたいと思ったのだ。

「ずいぶん昔に、寿命で死んだよ」

「そうですか」

チカや自分たち以外にも、この時代にやってきたものが何人もいたと言うことなのである。しかも、少なくとも長の祖父はこの時代で、生を終えているのだ。

「祖父も変わっていたが、昔からあの森から現れたものは変わっているのだ。行動も考え方も、異なっているのだ。その昔、あの森を禁忌とした者もそうだったらしい……」

シヨウとケンジロウは、長の話を黙ったまま聞いていた。

「その昔、この森周辺を縄張りになっているメス肉食恐竜がいた。彼女も祖父と同じように森から来た者だったらしいのだが、強く優しい者だったと聞いている。その彼女が、空のざわめく日は特に近づいてはいけないうと、それでこの森は立ち入り禁止にした。たまに好奇心に負けた者もいるが、妙な生き物に遭遇し命からがら逃げてきたとか、前々から不気味がられていたこともあって、そういう話が尾ひれを引いてそれはいつしかすべての恐竜たちの間で立ち入り禁止と言うのが定着していった」

「（その肉食恐竜って……）」

「（ああ、もしかすると、だな）」

森の立ち入りを禁止した最初の恐竜は、同じ現代人だった可能性がある。恐竜としてこの時代に送られてきた人がすぐに襲われないようにと言う彼女なりの優しさだったのかもしれない。

「おまえたちが、どこから来た何者かは問わない。この森に入ることも目をつぶろう。しかし、群れに仇をなすのならば、その時は全力で排除する」

長は、言いたいことだけを言うと言ったように去っていった。

「なんだかんだで、いい人だね」

「そうだな」

「僕らも早く戻ろう」

二人は群れと合流した。

「あ、ふたりとも、どこ行っていたのよ。探したんだから
いつものようにカグヤが声をかけてくれる。」

今日もまた、変哲の無い日常が始まるのだ。

長の昔話。(後書き)

それにしても、案外、恐竜時代の日常がまったく思いつかないものだなぁ。

もう少し恐竜サイドと絡みを思いつきたかった。

そこが、一番の反省点。

そこが思いつかないから、さっさと人間サイドのイベント発生させちゃったのです。

いつか、日常系思いついたら、そのうち書き加えることができるといいなぁ。

とにかく、恐竜サイド日常系は置いておいて、完結させる事を念頭に置こう。

とうとうえの、おねえさんは、すきですか？（前書き）

完結まで駆け足気味に書いていきます。

なんというか、ダイジェスト的になってしまっていて申し訳ない

……

としうえの、おねえさんは、すきですか？

次の日、二人は再びチカの元を訪れた。

今日、ここに来たのは他でもない。

昨日聞いた長の話から、この時代に送られてきた者が他にもいたことがわかった。

彼女は知っているのだろうか。

いや、知っているだろう。長くこの土地にいるのだから。

その疑問を彼女にぶつけた。

「……たくさんいたよ。何人もの子がこの時代に送られてきて、そして、誰一人、元の時代には戻っていない。今も、何人か、この時代で恐竜として生きていると思うよ。しかし……何人かはもう身も心も恐竜になってしまっていて、おそらく人間だったということを感じていないだろう……おそらく、彼らは人間から恐竜になるシステムがまだどこか不完全だった初期の頃から送りこまれたのだろう。帰れない以上、ある意味で、それは幸せだったのかもしれないが。……私が知る中では……そう、君たちが始めてなのかな。実験成功例は」

「じゃあ、僕らも戻れない可能性があったの？ うわぁ……」

チカの言葉にショウは思わず口を開いた。

「でも、戻るんだから、よかったじゃないか。別に、俺は帰れなくてもよかったけれどな。現代に、未練はあんまりないから」

「ぼ、ぼくは、ちょっと、困るかも」

『おそろしいことをきいた……』

「これは、元の世界に帰れるというのが分かったから話しているんだよ。まったくタカギは何人の子供を誘拐すれば気が済むんだ。こ

れは立派な犯罪だろう……」

あきれたようにチカは言った。

「ああ、そういえば誘拐には気をつけろて先生言っていたね」

終業式の日、確かそんな事をいつていたような気がしたのだ。

「まさか、犯人は博士だったと言うこと？」

「になるだろうな……」

「しかし、あたしが彼らに会ったとしても、私は何もできないからね。私はできる限り身を隠していたよ。彼らに見つかって絶望はさせたくなかったから。自分以外にも人間が送られていて、もう現代に戻れないのだと思わせたくなってね」

彼らも彼女の意見と同じであった。

現代に戻れない子達は、気の毒であるが、自分たちにできることはない。そして、知ってもなお、黙っていようと思うのだ。それはもはや、共犯も同然なのだ。

「寿命が来て死んでしまった子もいるし、他の動物に襲われて命を失った子もいる。自分が最初に送り込まれた場所に行けば何とかなると思って頻繁に通っていたものもいたな。運悪く鉢合わせた時、あたしには彼らが純粹な恐竜なのか、人間だった恐竜なのか、見分けるすではないから、逃げるか追い払うかしていたんだ」

チカは何かを思い出し、懐かしそうに目を細めた。

「しかし、今まで1匹だけその恐竜はあまりにも人間くさかったんで、あたしにも分かったことがある。確かティラノだったかな。その時は、お互いに自らの身に起こった不幸を理解し、無言のまま別れた。しかし、あの時は、最初本当に死ぬかと思ったよ。……でも、みんながみんな、あのティラノのように納得したとは思えない。あたしが知らずに逃げたり追い払った中にもいたろうし、襲い掛かってきた恐竜の中にもいたかもしれない。帰れないと分かった時の日

常の崩壊が、ずっと恐竜の姿で生きていかなくはならないという絶望が、人型のままこの時代にいるあたしに向いても仕方ない。おそらく、みな成人もしていない子供であろうし……未熟な分、感情は激しいからな。きっと彼らは何かに当たりたかったのだと思う」

シヨウとケンジロウは、無言のまま彼女を見つめた。

「長くここで生きてきたが、しかし、君たちのように話しかけてきたものはいなかったな。思いついても、うまく文字を書けるような恐竜ではなかったと言うこともありそうだが……」

木の枝を持つことができる恐竜は限られているのだ。

「俺たちは、いろいろ運がよかったんだな」

「だね」

二人は、しみじみそう思った。

——そろそろ、戻らなくてはいけない時間だ。

「本当は、この森は入っちゃいけない森って言われているからね」

「カグヤたちは、適当にごまかしつつだな。ま、ぶっちゃけ二人同時にいなくなればいいんだよな」

「そうだよ！」

頻繁に二人が同時にいなくなるのは得策ではないと気がついたのだ。現代に戻る時以外は、別に二人で森に行く必要も無いのである。

そして隙を見ては、チカのところへ行くと言う生活がはじまった。ケンジロウは、頻繁に彼女に会いに行っているようだ。シヨウは、ケンジロウを探すふりをして、彼女に会いに行くと言うパターンが多くなった。

そんなに好みの女性なのだろうか、シヨウはそう思っていた。

今日も、ケンジロウの姿が見えない。おそらくはチカに会いに行

っているのだろう。ショウが彼女の家に行くと、やはりケンジロウがいた。

ケンジロウ、太陽電気式時計を、彼女に渡している所であった。

『なにかのやくに立てば』

「ありがたい。時計はいまさら、と言う気分だが、あるのとないのとは、やはり、違うな。懐かしい故郷の品だ」

彼女は目を細めていた。

「……何しているんだ？ ケンは？」

ショウが少し離れた茂みで様子を伺っていると、ケンジロウとチカが抱き合っていたのだ。

恐竜と人間が抱き合っている図は奇妙だ。

「ケンジロウ……年上好きだったのか」

すっかり、合流するタイミングを失ったショウなのだった。

——そうして、あつという間に期限の1週間は過ぎていった。そして、何事もなく、いつものように現代に戻ることができた。

恐竜時代で1週間を過ごしたが、やはり現代では数時間しかたっていないかった。

「ちよっと、感覚がおかしくなりそうだね」

6500万年をかけぬける軌跡。

火山の爆ぜる音が聞こえる……

空に立ち上る煙は雲となり、地上に雨を降らす。それは時に濁流となり、地上のすべてを飲み込んでいく。最近、地球の活動が活発になってきた。

「……6500万年前に起きた、あの絶滅が近いんだ」

チカは空を見上げて、つぶやいた。そこには数ヶ月前から彗星の姿が見える。

——あの宙の尾をなびかせる流星は、いつこの地球の空に到達するのだろうか。

隕石の衝突。

チリは大気を覆い太陽光をさえぎる。これは、数年から数十年続くといわれている。

恐竜は津波や噴火に巻き込まれ生き残れなかった。大気中に満ちた二酸化炭素や火山性のガスで中毒を起こして生き残れなかった。太陽がさえぎられ植物は枯れ、植物食恐竜は飢えて生き残れなかった。獲物を失って肉食恐竜は飢えて生き残れなかった。

恐竜は寒さで生き残れなかった。

しかし、その時まで、この星はたしかに恐竜の星であったのだ。

別れに鳴く恐竜たち。

——そして今日も、いつものように、ショウとケンジロウは恐竜の時代へ渡った。

再び恐竜の時代に来て、合流してすぐにケンジロウはショウにこう言った。

「俺は、この時代に残るよ」

「え？」

ケンジロウが急に言い出したので、ショウは何のことかわからなかった。

「……じつは、博士には、話しつけてきた。俺はこの時代に残る」

「でも、施設とかはどうするんだ」

「……それは、大丈夫だ。話をつけてきたっていったらどう？ 施設には、博士の養子になるって、言ってきた。学校は、転校することになっている。手続きは、全部博士にしてもらったよ。今は夏休み中だし、クラスメイトにとっては、いつの間にかいなくなっていたことになるんだろうな」

「……おまえなあ」

後先考えず、行動に移すケンジロウはらしいといえば、らしかった。

「……でも、怖くないのか？」

「ん？」

「恐竜に未来はないんだぞ」

ぼくたちは、知っている。この先、この時代で何が起こるのかを。

「ああ」

「いつ、くるかわからないんだぞ」

絶滅の気配は、確実に迫ってきているのだ。

「わかってる。でも、俺はあの場所にいたい」
ケンジロウの決意は固いようだ。

「……分かったよ」

シヨウは彼の目に宿る強い決意を感じ、理解した。
「すまん」

「それにしても……人の姿でやってくればよかったじゃない」

「いや、人の姿である必要は無いんだ……もともと、人であることに重要性を感じていなかったし。それに、この世界は普通の人の身では辛いと、チカにもそう聞いた。俺は二とであるよりも、恐竜である方がなんだか性に合っているしな」

ケンジロウは親がいないことで、どこかさめたようなそんな生活をしてきたのだ。この恐竜時代に来て、満たされる何かを見つけたのなら、それがケンジロウにとっての幸いになるのならば、シヨウに何も言える事はないのだ。

破滅の時間が近くてもなお、そこにとどまって得るものの方が多いのだろう。人の人生は長いから幸せと言うわけではないのだ。

「あと、もうお前は今回の渡航で最後にしたほうがいい。もうここには来ないほうがいいかもしれない」

ケンジロウはとんでもないことを言う。

「なんで？」

「シヨウは知らないかもしれないが、俺はあの研究員に聞いたんだ。……もう、例の隕石が空にほのかに見えるらしい。今の研究が正しければ、それはメキシコのあたりに落ちる。今はまだ、大丈夫だろうが……近いうちに必ずそれは来る。そして、すぐとは言わないだろうが、何年もかけて地球全体にその波は広がる。早ければ数年で、どんなに遅くとも1世紀も経たないうちに、本当の絶滅がやってく

る。それは必ずやってくるんだ。だから……おまえは、現代いまを生き
ろ」

——シヨウは、ケンジロウと語り合った。

「僕は、いわゆる草食系男子だもんな。ああ、本当に草も食べる恐
竜になっちゃったけどね」

「……じゃあ、俺は、装飾系男子だな。こんなに羽で飾って」
ケンジロウは、おどけてその身の羽を逆立てる。

「……羽はもともと？ だから」
こんな冗談を言い合えるのも、今日が最後。

「僕たち、本当にお別れだね」
「ああ。元気だな」

「ケンも……その、精一杯生きてね」
「ああ。最後まで生き残ってやるさ」

「僕、大人になったら、ケンを見つけて見せるよ」
「ははは、それは大きな夢だな！ じゃあ、俺は土の中で6500
万年ほどシヨウが見つけてくれるまで待つとするよ」
二人は、果たされるとも知らない約束を交わす。

これが、親友との最後だった。

そして、全てが石と化す

シヨウは、現代に戻ってきた。

「博士……ケンにもう来るなといわれました。博士、僕は……」

「友人を失うのはつらからう」

博士はケンジロウから話を聞いて、事情を知っているのだろう。シヨウが何も言わずとも、頷き、優しく頭をなでてなぐさめてくれた。

「大丈夫です。ケンが、決めたことですから……」

しかし、シヨウは涙があふれてくるのを、とめられなかった。博士は何も言わず、シヨウが泣き止むまで待っていた。

「……また遊びに来てもいいですか？」

目を赤くはらしながらも、シヨウは博士に尋ねた。たとえ過去へいけなくとも、友人にもう会えなかったとしても、博士から色々学びたかったのだ。

「……ああ、いいとも。ただ、明日からこれのメンテナンスをするから、それが終わったら連絡しよう」

そして、いつものように、博士の車で学校の門まで送ってもらった。

——そして、その日の未明。

東海地方の山間を震源地とするちよつとした地震が起きた——

次の日の朝、シヨウはいつもどおり置きだして、父が見ているニュースを眺めながら、母の用意する朝食を待っていた。

テレビの画面に映し出されていたのは地震のことであった。

情報によると、地震の起きた時間帯は人の出歩く時間ではなかったことから被害は小さかったようで、眠っているところに棚が倒れてきたなど、軽い怪我人は何人かいたものの死者は無かった。しかし、行方不明者が一人いるらしい。

次に画面に映し出された行方不明者の名前を見て、シヨウは目を丸くした。

画面には確かに、そう書かれていたのだ。

『高木 賢太郎（52）』

「……はかせ？」

それは、確かにタカギ博士の名前であった。

空撮をしているヘリコプターが見覚えのある場所を映し出している。

その場所は……間違いがなければ、博士の施設があった場所だ。

緑の中に、茶色の地肌が削り取られたようにあいている。まるで、爆発したかのように、何も残っていなかった。

テレビでは研究所の地下深くにあった地層がずれて地盤の沈下が起こり、地震が起こったのではないかと、そう言っていた。しかし、シヨウはひとつ思い当たる節があった。

——それは、タイムマシンの爆発。

博士は、かつて言っていた。タイムマシンが爆発した場合、最悪この場所にクレーターができる、と。そんな爆弾並みの威力があれば、地震の引き金にもなるかもしれない。

タイムマシンのメンテナンスをすると博士は言っていたが、タイムマシンに何らかのトラブルがあり爆発したのだろうか？ それとも、別の要因があったのか。

今となっては、何が起こったのか、僕にはもうわからない――

宵に啼く竜は――

――ケンジロウは、シヨウに言っていないことがあった。

シヨウがこの時代に来なくなってから、数ヵ月後。ケンジロウは、今日もチカの元を訪れていた。今日はある目的のために、ここを訪れたのだ。

『母さん』

ケンジロウはそう文字を書く。

そうなのだ。

ケンジロウがこの時代に残った理由は、これなのだ。

彼は行方不明になった母に6500万年の時を超えて出会ったのだ。母に、自分を産んでくれた母親に。

「……なに？ ケンちゃん？」

チカはもうすっかり母親のようにケンジロウのことを呼んでいる。

「おまえら、でてこい！」

ケンジロウがそうひと鳴きすると、茂みから4匹の子恐竜が現れた。

「あら、かわいい。この子達は……」

『オレのこども』と、ケンジロウは説明した。

ケンジロウは4匹の子供たちをつれてきたのだ。恐竜たちは、慣れぬ人間の姿に警戒していたが、父親が大丈夫と言っているのだ、害はないのだろうと恐る恐る出てきたのである。

「あらあら。しかも、4つ子ちゃん。日本にいたら考えられないわね。あたしも、おばあちゃんなのね……」

チカは目を細めている。

「これが、夢の『かぞく、みずいらず』だ」
「そうね」

チカはにっこりと微笑んだ。

チカは、孫にあたる恐竜たちを撫で回している。

「ん……ちよっと、羽も体つきも少し変わっているわね……もともと、あの群れは、少し変わった個体が多いのは気がついていただけれど……」

チカは思った。もしかすると歴史的な事象をみているのではないかと。

「まさか、これが古顎類のはじまり？」

『こがくるい？』

「走鳥類とも言うな。まあ、ダチョウのような飛べない鳥と違ってもらっている。いくら遺伝子を恐竜に似せたとはいえ……もともとは人間と、恐竜の子ともだぞ。この時代にあるはずの無い未来にある遺伝子が、混ざった結果、普通の恐竜が生まれると思うか？」

聞けばあの群れには、過去何回か現代からやってきた者もいたと言うではないか。

「飛ぶ鳥と飛ばない鳥は、早い段階で分岐したと言われているが、それは新生代の初めと言われている……しかし、その兆しが中生代末期にあってもおかしくないのよ。詳しいことは『今後』を見てみないと分からないけれど、おそらくこの子らには竜骨突起の喪失という進化傾向も見られるはずだ」

チカは、子恐竜が嫌がっているのお構いなしに、さまざまな部位を触診していた。

『母さん、がくしゃみみたい』

「ははは、何を隠そう古顎類はあたしの専門だ」

目の色が変わっていると思ったら通りで、とケンジロウは思った。

『それなら、オレのしそんたち、ずっと、生きていくな。オレがいなくなっても、オレの子たちがいる。その子がいなくなっても、まごたちがいる。母さんは、もう、ひとりじゃない。オレがしんだあとも、オレのこどもたちの、しんかを、みまもっていてほしい』

ケンジロウは、そう書き綴った。

「ケンちゃん……あなたは、ほんとうに馬鹿ね」
『母さんもね』

世界の破滅なんて、怖くない。

たとえば明日にそれがこようとも、未来は来るのだから。

——ケンジロウは、チカに言っていないことがあった。

彼の計画する本当の家族水入らずは、まだ始まっていないのである。

ケンジロウは、この時代残ると決めた日、タカギ博士に宛てて手紙を書いたのだ。

そういえば、初めて父さんに宛てた手紙だ。

数日後には、博士の手元に届くだろう。
その手紙を読んだ時、博士はどうするだろうか。
きっと、この時代に来るに違いない。

そう、彼の計画する本当の家族水入らずは、まだ始まってすらい

ないのである――

最終話・夢見る痕跡《かせき》

ひとつの物事が終われば、それは、ひとつの始まりを表す。

恐竜たちの時代が終わっても、そのあとには、僕ら哺乳類の時代が待っている。これは、紛れもない歴史であり、大地に刻まれた事実で、誰にも覆すことはできない。

僕たちは、その大きな循環の中、小さな繰り返しをしながら生きている。そう、学生時代が終わって、社会人としての生活が始まるのと似ている。

そして、今、またひとつ、小さな終わりが来て、小さな始まりが来るのだ。

僕がケンジロウと別れ、次の日には博士が行方不明になった。そして、あのタイムマシンがあつた施設を見に行くと、すべてがなくなっていた。

何もかも、夢であつたように……。

——しかし、10年近くたった今もはっきりと覚えている。

10年後、僕は地球環境系の大学に入学し化石に触れて研究している。多少、遺伝子工学的なものにも手を出しているが、専門は古生物である。

そして、偶然にもあの化石を目にする機会を得た。

あの時、10年前の夏、話題になっていた白亜紀後期の地層から発見された、人型の化石と恐竜が同じ場所から発見されたという、

あの謎の化石と偶然にも対面することができたのである。

今もまだ、その化石については論争が続いている。人々はその謎に対して、答えの無い回答を求めては、否定しまた議論している。しかし僕にとって、その謎は謎ではない。ただ、存在した^{過去}事実なのだ。その真実を知るものは、彼らの中にはいない、ただそれだけのことなのだ。

僕は、知っている。あの時代に、現代人がいたことを。

そう、この発見されたこの化石は、恐竜人間や宇宙人ではなく、紛れもなく現代人であるのだ。

そのことを、僕は知っている。

僕が恐竜だったころ。当時は新聞の情報だけで、現物の詳しいことはかかれていなかった。当時の僕らは、その化石がそこで出会ったあの人物だと思ったのだが――

何かの現象の結果を知った^{けっか}としよう。その原因は、何なのか。^{過去}その謎を持つ時代に興味を持つのは人の探究心・好奇心を刺激する。しかし、その原因が、必ずしも、かつて自分が導き出したものとは限らない。

ぼくはその化石を見て、驚愕する。

それは、人と恐竜が抱き合うように、明らかに「埋葬」されていた。

人骨のほうは、明らかに現代人の特徴を備えている。

この骨は、あの時代にいた彼女のものにしては小さすぎる長身だ

った。そして何よりも、この骨は何歳であるかは断定は難しいが、頭骨や骨盤の特徴から導き出されるのは、あきらかに成人の男性のもの。

僕は思い当たる節があつて、この化石から導き出された予想身長や予想体重といった身体的な特徴と、ある人物のプロフィールを照合する。

「やっぱり……」

それは、タカギ博士のものに限りなく近かった。

老いることのない体の彼女。あの時代に残った親友。そして、あの日、行方不明になった博士。すべてがつながったような気がした。

彼女は愛した男性と、あの時代で再開したのだ。ケンジロウも、博士がいるからと言って会いに行くのを止めるようなやつではない。頻繁に彼女の元に会いに行っているだろう。彼らは案外、仲良く暮らしたのかもしれない。そうでなければ、こんなに仲良くここにあるはずはないのだ。

そして、不老ではない彼らは、いつしか死んだ。だから、彼女は彼らを埋葬した。ただ、それだけなのだ。

僕は、その状況が目に見えかぶようだった。しかし、それが正しいかどうかは分からない。それを知ってだては、もう無いのだから。

「……にしても、6500万年ぶりの再会か、ケン？ 博士？」
僕の瞳に、うつすらと温かいものがたまっていくのを感じた。

この化石は、わが親友ケンジロウとタガキ博士。まちがいに、あの時代に生きた証拠。

しかし、彼女は……？

「……チカ……」

僕は彼女の名を呼ぶ。

もしかしたら、彼女は……？

今、どこで何をしているのか。

生きているのか、どこかでその命は尽きたのか。

でも僕は感じる。彼女はあの大絶滅を生き残り、氷河期を幾度も耐え、6500万年と言う長い時を世界のどこかで生きているのかもしれない、と。

「もしも、生きているのなら……6500万年ぶりに、再会してみたい気もするが」

僕が彼女を見つけ出すのは、限りなく0に近いかもしれないが、もし生きているのであれば、いづれ会うこともあるかもしれない。僕の人生は、有限とはいえ、まだ長いからだから。

縁というものは、そういうものだ。

僕は、青く澄んだ空を見上げた。

鳥が大空を飛んでいる。自由に、羽ばたいている。
あの時代から、脈々と続いている進化の歴史の結晶。

大地は今も、その痕跡^謎を残し、続いている――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7375/>

夢見る竜は、宵に啼く石と化す

2011年10月9日03時22分発行